

---

# ブザーピーター

龍瞳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブザービーター

### 【Zコード】

Z6041F

### 【作者名】

龍瞳

### 【あらすじ】

主人公大介の高校生活の物語。バスケットボール恋愛や部活動を通して成長していく姿を描いております。

入学前の一通の手紙…。

それは来月から通う高校のバスケットボール部からだつた。中学時代にバスケ部に所属していた奴ら全員に勧誘の通知が行つてゐるだろう。他の部はどうなんだ…？

中学時代、何度か練習に行つた事があるので知つてゐるが、ここ  
の男子部は弱い…。弱いというか、男子は部員数が少ないのだ。

そもそもこの高校は数年前まで女子高だつた。昨今の少子化で近くにあつた高校が廃校となり、伝統あるこの女子校が残される事となつた。そして、その際男女共学の高校へと生まれ変わつたのだ。恐らく俺が入部すれば一番背が高いだろう。それに入部したら即レギュラーになる自信だつてある。だが俺は決めていん…、俺はバ  
イトをして、彼女作つて、楽しい高校生活を満喫する事を…。夏のあの糞暑い体育館で汗まみれになるなんて真つ平ゴメンなのだ。

「大介！」

母親がずっと下の階から俺を呼んでいたみたいだ…、ウチの親は共働き…、親父は大型家電チェーンで働き、母親は看護士をしてい  
る。といつても先日、俺の中学卒業を期に離婚届けを役所に提出し  
たようだ。

母親が朝からいるという事は、非番か夜勤明けなのだろう。その母親が俺の頭からヘッドフォンを取り上げ名前を呼んだのだ。

「なんだよ、びっくりするだろー！」

「さつきから呼んでたけど返事がないから、部屋まで来たんでしょ

!?

「でー、何?」

「孝正君来てるわよ。久しぶりに見たから分からなかつたけど、男っぽくなつたわね~。」

「タカ?なんだろ?」

「知らないわよ。玄関で待つてるから早く行きなさい。」

「分かつたよ。」

階段を降りていると『たまには部屋掃除しなさい。』と後ろから聞こえてきたが、そこは聞こえないフリ。

「よつ!」

「よつ!」

「どうした?タカがウチ来るなんて珍しいなー小学校の時以来じゃね?」

「そんな前か?」

「で?今日はどうした?なんの用?」

「いや…、大介にも手紙きてるんだろう?その…、バスケ部から…。」

バスケ部を引退して忘れてたが、タカは中学時代に同じ部活で汗

を流した仲だ。小学校の時もミニバスで同じチームだったのに、高校まで一緒になるとは…。要は腐れ縁つてやつだ。

「俺は行かなよ。行くなら一人で行ってくれ！」

「なんでだよ。どうせ高校でもやるんだろ？春休みで暇なんだから、高校行って汗流そうぜ…」

「バスケは中学で止めるこじた…」

「なんで？高校でも一緒にやろうよ。」

「一緒つて…。」

「大介、ちょ、ちょっと待つてな…。」

そう言つて、タカが一度玄関を出ると向やら誰かいて、そいつらと話している。誰だ？と思つてると再びドアが開いて、そこにいた人物と目が合つた。

「ここにちは神田君。」

「ふつ、福島さん…？それに直江さんまで…。」

「」の同じ中学の女子バスケ部にいた2人も同じ高校に進むの。中でも福島さんは“カワイイ子”だなとひそかに思つていた。しかし3年間一度も同じクラスになつた事がなく、ついに一度も話す機会が無かつたのだ。その福島さんが目の前にいて、俺と話している…。顔に出してないつもりだが結構ドキドキしているのだ。

卷之三

卷之三

「神田君バスケしに行くよ！」

女子部のキャプテンだった直江さんは、結構強気に強引なプレーをする子だったが、こんな時の言動も強気なのだ。

悪いな……俺このあとバイトの直接行く予定なんだよ。

本当は…、福島さんがいたから、行つてもいいかな？ってグラついたけど、残念ながら2時間後の11時にバイトの面接なのだ。

## 「何処でバイトするの?」

採用されるか分からなければ、駒前のヌタリーキンケーリビー。

卷之三

「何でこいつは陽子？」

「お嬢ちゃんもソリでハイヒールでるから…」

マジー? 福島さんにお姉ちゃんいるんだ。

「本当? だったら陽子から不採用にしてもいいよって言つてよ。そして神田君も晴れてバスケ部入部!」

「なんでそつなるんだよ？」

「それは……。」

「ん……なんだここの間は……？」

「そひ、それはあれよ……、ん~と、同じ中学の子が多い方がいいじ  
ゃん！」

「男女別だから意味なくね？」

「ん……、まあ……。」

「とつあえず今日は面接だから無理だつて……。」

「じや、明日も迎えに来るから、明日は準備しておこつね。」

「なつ……？」

全く直江つて奴はウザいな……。出来るなら春休みに学校なんて行  
きたくないものだ。

## 02 口の軽い男

結局バイトには採用されて、翌日からバイト生活が始まる事になった。それを知つてか知らずか、じこつはその朝から俺を起しにきたのだ。

「なあ、行こうぜ?」

「今更言うのもなんだけどやー、タカつて昔つから空氣読めない奴だよな。」

「なんだよそれ?」

「いや、だからやー、昨日の俺のこと見てて、"じこつ高校でバスケやるつもり無いな!"って感じなかつたわけ?」

「えつ? そうなの? やらないの?」

分かつてたけど、タカは相変わらずな奴だ。

「悪いな。」

「他にやりたい部活でもあんのか?」

「帰宅部だよ。」

「帰宅つて…、何にも入らないわけ?」

「分かんねえ…。それに男子の数だつて極端に少ないんだから、ど

んな部活あるかわからんねえだろ?」

「まあ…。でもバスケに男子部はあるぜー。」

「それは俺も知ってる。」

「そっか…、そりだよな…。」

「とにかく、俺は今日からバイトだから行けねえから。」

「分かったよ。悪かったよ…。じや…、せめて4月から一緒に学校行こ。」

「ああ、分かったよ。」

「分かったよ…、そりだ!」

「そんじや、その頃になつたら電話するよ。」

「分かっても…。」

俺は昨日想つた一つの疑問をぶつけてみた

「タカラつていつからあの一人と仲いいの?」

「いつからつて…、直江とは部長同士だから、一緒に抽選会に行つてたし…。」

「なるほどね…。福島とは?」

「福島さんとは同じクラスだつたからっかな…？でもあんなに話したのは昨日が初めてだな…？」

「そりなんだ…。」

直江はどうでもいいが、福島陽子と仲良くなつたのは羨ましい限りだ。

「今日は表に待つてないぞ…。」

玄関のドアが開きっぱなしなんだから、そんなのは分かりきつている事実だった。

「よろしく言ひしむいてよ。」

「分かつた。あーそりだ。これは言ひなつて言われてるんだけどさー、直江がお前の事好きっぽいぞ。」

「なつ…。」

「お前あいつの事どうよ…。」

「どう、どうつて…。」

なんで福島陽子じゃなくて、よつこよつて直江…、直江の下の名前つてなんだつけ？つていうか下の名前も知らない子のなんだから、100%興味無いに決まつてる。

「どうなのよ…。」

選ぶ権利があるなら、俺は確實に福島の方を選ぶ。だけじゃなくて  
「イツに“福島さん可愛いよな”みたいな事は言えない。なぜなら  
「」については口が軽いからだ。

「聞かなかつた事にしてくれ！」

「ん……うん、分かつたよ。」

あれつ？なんか勘違いされてないか？タカにははっきり言った方が  
いいのか……？

「タカちよつと待て……これだけははつせつとおへなだり、

「うん。」

「俺は直江には全く興味ないからな！」

「あん？」

「いや、だから……」

「そこまで言つつか？」

「えつ？」

「それつて酷くね？」「

「だから……ていうか、タカはどっちの味方なわけ？女の直江の味  
方するつてか？」

「いや…、味方つて…、」

「まあ、いいけど…、」

「うん…、あつ！俺、遅刻するから行くわ！」

「おうー！氣をつけくな！」

自分に都合が悪くなつたからか、タ力は時計の無い左腕を見てそう言つたのだった。

振り向いて去るタ力に向かつて、

「直江に余計な事言つくなよー！」

これに振り返る事なく左腕を振つて応えてくれた。喋らないでいてくれるかどうかは分からぬ。でも言わばにはいれなかつた。

「 むりじくお願ひします。」

「 神田君は元氣がいいわね。」

「 あひ、すみません。」

「 こ、ここのよ。私が一応今日の時間の責任者の見竹です。よ  
うじくね。」

「 ようじくお願いします。」

「 早速なんだけど…、」

「 ひのじりの女性社員の見竹さんが、今日は色々教えてくれるみ  
たいだ。そして、まずは接客…ではなく、ローハーを煎れる方から  
教えてくれるらしき…。」

「 神田君ひもけぬんじょ？」

「 えつ、ひのじですかね？」

「 はあ…。」

「 ウチの店のバイトの方で、レベル高こわよ。」

「は? レベル…?」

言われてみれば、今いる子は綺麗…、いや、可愛い。男はこの時  
間俺しかいないから分からぬいけど…。

「店長みたくバイトの子にちよつかい出さないでね。」

「ちよつかいですか?」

店長め、職権乱用か?

「そう。頼むね。」

「はあ…。だつたら、誘われる分には、いいですかね? その…、」

「随分自信あるのね?」

「いや…、その…、彼女募集中なんで…、そつだ! 見竹さん今度ご  
馳走して下さい。」

「私?」

「一瞬」のお姉さんが照れたように見えた。

「ダメっすか? 他のスタッフに手を出さない抑止にもなりますよー。」

「うーん、分かった。私と休みが一緒の日だつたらいいわよ。」

俺のシフトは、基本的に月水金の夕方5時からラストの10時までと昨日の面接で決まった。あと突発的な休みが出たら、来て欲し

いと言われてる。

俺のシフトは、まだ見竹さんには伝わってないらしく、そう言つたのだろうとこの時は思った。が、要は年上の見竹さんに上手くかわされただけなのだ…。

見竹さん以外に今いるスタッフは2人の女性だった。仕事をこなしていくうちに、そのスタッフとも会話するタイミングがあり、“好みのタイプ！”と思つてた子が福島のお姉さんだった。よく見ると似てる。

姉妹揃つて可愛いなんて、なんてすごい確率なんだろ…。完璧に両親のDNAがいいに違いない。とにかくお姉さんとは、徐々に近づいて仲良くなるしかない！しかしこの日の仕事中は、業務的な会話以外はまるで無く、プライベートな話は無しだつた…。

このバイトは常に立ち仕事で、意外と疲れる事が分かった…。見た目と実際やるのでは全然違つたのだ。

片付けが終わり、更衣室で着替えてると見竹さんに呼ばれた…、

「はい、これ。」

「はい？」

何だ？と思つて渡されたのは、スタッフ全員の載つたスケジュール表と一枚の名刺で、名刺の裏には携帯番号とアドレスが手書きで書かれていた。

「神田君も携帯買つたら教えてね。」

そうなのだ。小学生でも持たされていこの時代に、中学時代の俺は持つ事を許可されていなかつた…。でもついに、入学祝いという名目で、4月に親父の勤める家電屋さんで買つてもらえることになつたのだ。一応母親からのプレゼントは自転車で、今日もすでに

それを乗つて来ている。

「分かりました。春休み中にはゲットする予定なんで、初メールは見竹さんに送ります。」

「あらー? なんだか悪いな…。でも、ありがとー楽しみに待つてる。」

「

「はい。」

「あと、福島さんを途中まで送つていつてくれない? わたし神田君の履歴書で住所見たんだけど、案外近そうだし…。」

「はあ…、」

確かに妹の陽子とは同じ中学だから、俺はお姉さんの後輩に当たるわけで…、すなわち同じ学区に住むという事になる…。

「神田君が送り狼にならないでよー!」

「しつ、しませんよ!」

「嘘んでるし。」

「たくつ…。」

そこへ俺がいるため店内のトイレで着替えていた福島陽子の姉洋子さんが、同じくバイトの新田さんと出てきた。

「福島さん、今日はたくましいボディガード付けるから、安心して

帰れるね。」

「安心して?」

「そうなのよ。ウチの子達ホステスでもないのに、店には女の子目的の常連さんがいてね。ちょっと間違えばストーカーなんだけどね。」

「私、大丈夫です。一人で帰れます。」

「いやいや、逆に送らせて欲しいです。…って、俺もそいつらと変わらないか?」

「いや、送りますよ!これでも空手習つてたことがあるので、いざとなつたら力になりますよ!」

部活が忙しく中学に入つて辞めたけど、先生からは『いいセンスしてゐるのに勿体ない。』と言われたほどだった。

「へへっ!テカイだけかと思つたら意外と男らしいとこあるんだ?」

「意外つての余分じやありません?」

「ははは…。」

そんなこんなで、俺は福島姉こと涼子さんを送つて行くことになつたのだ。

「神田君『メソンね。』

「いえ、かまいません。ほとんど通り道ですから。」

家の場所を聞いたり、メインの通りの一本裏の道で、これならほぼ通り道だ。それにウチからも近い。

「実は俺、妹さんと同じ部活だったんですよ。」

「みたいね。朝、陽子から聞いた。神田君って大きいもんね。」

「たまたま『テカイ』って怖いって言われますけどね。」

「そうなの?」

「はい。コンプレックスに感じたことはないですけど、『テカイ』って言われると結構ショックです。」

「もうバスケやらないの?」

「バスケ部男子は弱いみたいなんです。女子は強いみたいですがね。」

「知ってる。」

やつぱり県の代表になつて全国大会に出るへりいだから有名なんだ…、

「私も去年まであそこにいたから…。」

「えつ？あの…、OG…？お姉さんっておいくつですか？」

女性とはいえ、若いから歳を聞いても平気だな。

「18よ。この3月に卒業したばかり…。去年の6月に引退するまで私もあのコートの上にいたわ…。」

「お姉さんもバスケやってたんだ…。」

「プレーは1年間だけ…、あとは実質クビだけじね…。」

「クビ？高校の部活でクビなんてあるんすか？」

「女子部はね。毎年40人くらい入部してきて、3年まであるの…。中学時代有名な選手でも監督が気にいらないと即2軍行きでし…。」

「マジかよ…、

「それでどんどん辞めていくて、新人が入ってくる4月には30人近くは辞めてるわね…。」

「1年で30人も…、」

「ベンチにはレギュラー含め15人しか入れないから、1・2年でいい選手がいれば、3年だって試合で応援席から観戦つてこともありますよ…。」

「そうなんですか…。」

「だから2年からは男子部のマネージャーやってたの。だけど男子は弱くてさ…。人数だつてせいぜい毎年2・3人だしね…。」

「それじゃ、ゲームも出来ないじゃん…?」

「だからマネージャーが男子の練習に混ざるの。」

「へつ?」

「私が3年の時は、部員6人マネージャー6人の仲良しクラブだったからね。」

「マジっすか? もしかしてその中でカップルがいたとか?」

「もちろん。でもウチの高校って…、もう卒業したから『ウチの高校』って言い方変よね。」

「いえ…、」

「あの学校つて、ちょっとしたハーレム状態だから、変な奴じゃない限りモテるのよ。だから一股されてるとか色々あつてなんかね…。」

「

なんだかハーレムつていい響きだ!」

「ウチらの代の男女比が1対7だつたし、1回下の…次の新3年も1対4くらいで、2年は1対3くらいになつたみたいだけね。」

そつなんだ…、ハーレムか…、

「神田君聞いてる?」

「…。」

「神田君?」

「えつ…?あつ、聞いてます、聞いてます。」

「で、話をバスケに戻すけど、陽子が言つたは今年の男子は粒ぞろいらしいの!なんでも県で優勝したチームのガードとセンターがいて、神田君のチームメートだった浅野君に…、」

「えつ?今、誰つて言いました?」

「ん…、え?と浅野君?」

「その前!タカの前に何て言つた?」

「あー、県で優勝したチームのガードとセンター…、」

「マジっすか?」

「ええ…、だから出来れば神田君にも入つて欲しいかなって、思つて…、神田君つて中学時代は相当有名な選手だったんでしょ?」

「マジかよ…、ウチらが準決勝で負けたチームのガードとセンターが同じ学校に入ったのかよ…!?いや、待てよ…、あいつらなら強豪校に引っ張られてもおかしくない実力の持ち主のはず…。なんで

ウチの学校に……？俺みたいに断つたのか？レギュラーじゃなくて控えの方のメンバーか？

「ちょっと神田君聞いてる？」

「えつ？」

俺が考え事してる間にも、冴子さんは俺に話しかけてたみたいだ。

「なんでしょう？」

「だから神田君もバスケ部入つてよ。」

「無理ですよ。」

「なんで？」

「なんであって……、バイト入つたばかりだし……、」

「辞めちゃいなよ。」

「そしたら、俺、昼飯食えなくなります。」

「そうなの？お小遣は？」

「ないですよ。4月からの携帯料金も自分で払わないといけないですし……。」

「大変なのね……。」

「涼子さん、が眞こでくれるなら、おめでたさう。」

「えつ？」

「冗談す。」

「……こへり欲しこへりあつたり呪つるへ。」

「えつ？」

「だから、丑に元へりあつたり呪つるの？」

「いや、お姉さん、冗談すから。それに俺つて奢り盛つて、今、食欲無しですし……」

「やつか……、ちよつと奢りやつた……。」

「マジかよ……？見竹さんといい、涼子さんといい、俺つてなんかの素質あるのかな……？ジゴロ？なんか違うな……。甘え上手？でも年上もありかも……。」

## 05 予想外の訪問者

今日はバイトが休みで、予定も無いし暇だった。そこで俺は高校にバスケの見学に行く事を考えていた。入部するつもりはないが、福島さんが練習してるなら見に行つてもいいかな、そう思つたのだ。だけど…、いくら待つてもタカが迎えに来ない…。

さすがに昨日あれだけ言つたら来ないか…?と思つてたら、家のチャイムが鳴つた。おつー?さすが空氣読めない男!…と思いつつドアを開けると…、

「おはよっ神田君!」

「おは…よ…う…つ…って、何?福島さん一人?」

「うん。」

「あつ、そう…。で、どうした?」

「えつ…、あ…、うん。」

そこには運悪く近所のおばちゃんに見つかって、

「大介彼女でも出来たんか?」

と冷やかされてしまった。俺も福島もバツが悪い。俺は開き直つて、

「やうだよ。だからデート代貸してーやー!」

「大介に貸したら返りたくないから無理やー。」

「つたぐ、口の悪いおばちゃんやなー。」

「おおきこー。」

近所で有名な関西出身の人で、この人の家族と話す時にだけ、なんちゃつて関西弁を使つてみるのだ。

「今日も部活行くの?」

「私は諦めた。」

「はあ?諦めた?つて、バスケ部入らないつてこと?」

「うん。」

「まだ2日行つただけだろ?」

「だつて…、部員数多いし、新人の子に話聞いたら、中学の大会で上位の常連のレギュラーの子ばっかりだし…、」

「ふうん、そなうなんだ。で、そんな福島さんがウチに何しに来たの?」

「えつと…、それでお姉ちゃんと一緒に…、」

「マネージャーやるとか?」

「えつ?あつ、聞いたんだ?」

「まあ……」

「男子部のマネージャーさんひいて……」

「まあ、福島。」

「ん……？」

「家上がってかね? どうせ今日は部活に行かないんだ?」

「えつ……、あ……」

「いいから、近所の田もあるしね……」

そう言つて強引に福島の手を引っ張つて、部屋へと上げたのだ。  
俺は一度一階に下りて、紅茶の準備を済ませて部屋へと戻つた。

「男子の部屋に入るの初めて!」

「やうなの?」

「うん。ウチは一人姉妹だから……」

「あー、冴子さんね。お姉さんも可愛い人だね。」

「そりがな……?」

なんか照れてる。でもそんな、はにかんでる顔も可愛い……。多分  
『お姉さんも』って言つたからだね。その言葉には“陽子ちゃん

も可愛いけど、お姉さんも…』という前置きが隠れているからだ。だけど、そこは直接言わずに、遠回しに言つてみた。

「で、今日は俺をバスケ部にでも勧誘しに来たの？」

小さく頷いて、口ひちを見てる。

「タ力に頼まれたとか？」

「タ力って浅野君だよね？」

「そう。」

「それもあるけど…、私も高校で神田君のプレー見てみたいし…。」

「福島さんが俺の彼女になつてくれるんだつたら考えてもいいけど？」

ちょっと鎌をかけてみた…、反応をみると視線を反らされた…。脈無しか？

「昨日涉子さんにも言つたんだけじれ…。」

「ねえ？」

「ん？」

「お姉ちゃんの事名前で呼んでるんだね？」

「いや…、バイトの人が『サム』って名前で呼んでたから…、つ

い…。」

「そう…。」

「ダメだつたかな?」

「いいけど…。で、考えてくれない?」

「何を?」

「部活!」

「部活か…。」

「堀北中の大島君と加藤君も、昨日も一昨日も来てたみたいよ。あの一人つて中学の時全国大会行つてる有名な人達だよね?」

「堀北中ね…。でも全国大会じゃ、2回戦負けだけだね。」

「だけど、上手いって事でしょ?」

「まあ…、でもあの一人はスコアラーじゃないからな。」

「スコアラー?」

「スコアラーって言わない?」

「悪かつたわね!素人みたいで!」

「いや…。直訳すれば得点者だけど、バスケに限れば点取り屋つて

事だよ。」

「ふうん。」

「堀北中のガードは、ゲームメイクは上手いしすばしつこい奴だけ身長が低い。センターの方は、リバウンドはズバ抜けて凄い選手だけど、点を取るタイプじゃない。試合でマッチアップしたけど、あんまり勝負してこなかつたな。」

「浅野君だつているじゃない。中学の時は神田君の次に点取つてたんでしょ？」

「タカは…、そうだなスリーポイントの確率はいいし、体力もあるから走り負けない。速攻重視のチームならフィットするかもね。」

「そして神田君…」

「随分俺にこだわるね？」

「そりや…、ウチの県の中学校のベスト5に選出された逸材だもん…。その身長で、外も中もこなせるプレーヤーだし。」

確かにベスト5には選出された。だが俺らは準決でそいつらに負けたのだ。所詮俺とタカでもつてたチームで、選手層も薄い、ディフェンスの弱いチームだった。

「悪い…、実はウチの親が俺の中学卒業を期に正式に離婚してさ、しばらくは節制しなきやなんだよ。口口に住めてるだけでもラッキーだし。生活厳しくなるだろうから、俺も少しくらいバイトして負担減らしたいしさ…。だから遊んでる暇無いんだ。」

かと言つて俺と親父の仲は悪い訳ではない。携帯電話も買つてくれる予定だ。

「離婚したんだ…。そつ…、ゴメンね…、神田君の家庭事情知らなかつたから…。」

「だからバイトして、昼飯代とちょっとした小遣いくらい、自分で稼がないとな。」

「そつか…。」

「どうやら福島は俺の事情を理解してくれたようだ。やつぱりタ力にも言つた方がいいかな…。」

## 06 強引な俺

それからお姉さんの冴子さんをとか色々と話をした。だけど肝心の本人の話になると言いたくないようではしゃがむのだ。

「わうわう神田君はどうなの？好きな子いなかつたの？」

「俺？ そりだな…、可愛いなとか、綺麗だなってのは思つ事もあつたけど、きっかけがなくてね。」

「ダメだよ～。男なんだから積極的に声かけなきやー。浅野君と神田君は人気あつたんだから！」

「そうなの？」

「うん…。」

「ちなみに福島はどうちかといえば、どうちだつたの？」

さつき“中学の時、好きな奴いた？”って質問した時には答なかつたから、今度は違う角度から聞いてみた。

「えつ？」

「だから俺とタカだつたらどうち派だつたの？俺派？タカ派？」

「私は…、」

タカ派か…？もしそうだつたらガツカリだな…。逆にどうひもトイ

ヤーってバツサリいかれたりして…。

「和代は神田君が好きみたいよ。彼女募集中なら和代と付き合ってみれば?」

和代って直江か?もしそうならバスだな…。

「福島の事を聞いてるんだよ。タカ派?」

チラッと福島の方を見ると、どうもそんな感じだった。

「そつか…。」

「違うの…、」

ん?

「和代とね…、和代と誰が好き?みたいな話をしたことがあって、私も始めは、神田君ってバスケ上手いしカッコイイな~って思つてたの。でも…、和代に『神田君の事好きだから取らないでね!』みたいな感じで言われて、つい私は『浅野君の方がタイプかな…、』って、口から勝手に出ちゃつてて…。」

勝手について…、

「で、回りもなんだかそんな感じで見始めて、気付いたらそういうのかな~って、自分でも思い始めて…。」

恋は勘違いからつてパターンか…?

「結局、本当に好きかどうか分からんだけじゃね…。」

「告白してみれば？福島なら大概の奴がOKすると思ひよ。俺が保証する。」

「そんな…。そんな」と言つたら神田君の方が大概の子がOKするよ。」

「だつたら、俺と付き合つてよ。」

「え…、」

ダメか…？それとも迷つてくれてる？  
しばらく沈黙があつて苦しかった。

「タカが良かつたら、俺からタカに言つてやるよ。福島がお前の事好きらしいぞ！つて。」

「やつ、止めてよーそんな事しないでよねーもしそれでフラれでもしたら、マネージャーやつづらくなつちやうじやんー。」

少し分かつた事がある。少なくとも福島はタカの事が気になるみたいだ。それとも…、それともちゃんと知つてみるか？

「分かつたよ。」

「神田君は？和代の事はダメ？」

「ちよつと待つてーわざから言つてゐる和代つて誰？」

「和代は和代よ！直江和代！下の名前知らなかつたの？」

やつぱり直江か…、

「彼女には全く興味ないからな…。」

「えつ？」

「あつ、『ゴメン。直江は女として意識した事ないからや…。』

「そつか…。」

「これでタ力からも福島からも、今後この話が出る」とはないだろう。

そこに夜勤明けなのか母親が帰つてきたらしい。

「大介いる～？」

つていうかワザと大きい声出しているに違いない。玄関に女の子のブーツがあつて、部屋にいるのは明確なのだ。

「悪い。紅茶でも飲んでちょっと待つてて。」

「うん。」

そう言つて一階に行くと、

「何？何？新しい彼女？」

「ちびーよ。」

「だつたら…、」

「恋の相談つてやつだよ。」

「ふ～ん。まあ、相談してたらいつの間にか恋に落ちてたつてパターンもあるから、頑張りなさいよ。」

「はあ…？そつちは？夜勤明けだつたの？」

「ん？まあね。」

俺は知つていた。親父の浮気が離婚原因だつたが、母親の方も随分昔から医者と遊んでる事を…。でも親父は一切知らないだろう。男つて奴は自分の奥さんや彼女が、浮気なんかしてないと思い込んでしまう質らしさ。

「ちよつとテートしてくるから臨時の小遣い支給してよ。」

「彼女じゃないんでしょ？」

「だつて夜勤明けなら、これから寝るんだろ？（ひねをくしたら悪い）から俺らが外で…、」

「ん…？まさかその娘襲つもつだつたの？」

「何言つてゐの？」

「ちやんと避妊するんだよ…！」

「あー？だから、彼女じゃないんだから襲わないって！」

「ふうん、彼女だったら襲うんだ？ちょっと待ってな。」

「おーい！揚げ足取るなよな…。」

そう言つて母親は自分のベッドルームに行くと何か持つて出てきた。小遣いくれるのかか？一万円札か五千円札か…？と、右手で受け取つた感触はお札ではなく、なんだかビニールっぽい感じ…？何だろ？と思つて見てみると、なつ、なんど！「ゾンドーム」だった。

「ゾンドームするのに相手の合意がなかつたら、しちゃダメだからね。」

ウチの母親はどつかズれてる…、それとも俺がズれてるのか…？

「じゃ、私は出かけるから。」

「どこの…？」

「仕事仲間と買物。じゃ、戸締まりお願ひね。」

「分かつてるー。」

戸締まり！？泊まりか？つて、男か？

母親が出掛けたので部屋に戻ると、福島が俺の机の上にあつた少しきっチな本に見入つていた。つていうか、普通それは見ないだろ！そして俺はそつと福島の後ろに立つたのだ。

「その本あげようか？」

「ワッ！」

びっくりして本を閉じて、机に向いた。目が合ひ。俺は福島に少し顔を寄せ、

「女の子でもそういう本に興味あるんだ？」

「やつ、そんなわけないじゃん！」

なにやら動搖しまくりで、額から汗が噴き出しそうな勢いだ。なんだか見つめ合つてゐみたいだったので、思いつ切り顔を近付けてみた。こつちもドキドキだが、相手もドキドキしてははずだ。

「神田……君……？」

チュウッ。勢いに任せてキスしてしまった。フレンチなキス……。不安げな顔をして俺を見ている。そして少し顔を離した。

「俺といふやつがおつまみ？」

「……。」

「一応、真剣に言つてみるんだナビ？」

「……。」

「前から福島の事にいなつて思つてたし……、」

「嘘……？」

「マジ。」

「でも……、和代に何て言つたらいいか……？」

「それって彼女になるのは〇〇って事？」

「いや……、だから……。」

「よしー付き合つだした報酬をどうやって直江にするか一緒に考えよーー！」

「…………うん。」

「アレ……？」「れつてOK……だよな？せっぱり男には強いてへべつてこも必要か？」

「神田君……。」

「何？」

「さつきのフアーストキスだつたんだ……、」

「えつ？あー、さう。さうだったんだ……。そりや、あれだよ……、フアーストキスつてもんは突然なものなんだよ。」

「何それ？」

「俺じや不満だつた？」

「えつ……いや……、そんな事ないけど……、」

「何なら初エッチもしつく?」

「…。」

「どうやら福島にまだ早いみたいだ。」

「ジロークだよ。」

「神田君なら……いいよ……。」

「無理するなつてー。」

「無理してない……、エッチしたら彼女になつた実感沸くかもしけないし……。」

そんな理由で初エッチするつてどうなの?だけど、俺は15歳の健康な男なわけで、結局俺は彼女の処女を頂いてしまつた。彼女は俺と恋人になつた事を、実感出来たのだろうか…??

それからバイトのある日でも陽子とデートするようになっていた。といつてもバイト代もまだ入つてなくお金がないから主に自宅デートだ。そして母親が家にいる時は外に出掛け、手を繋ぎながら街を歩いたり公園に行つたりした。

母親の仕事は田舎の方が多く、大体ウチらは自宅テレートになる。始めは色々話しているのだが、途中からイチャイチャしだして、キスして、ボディタッチしてるうちに、エッチする流れになつていく。あれからほとんど毎日会つてゐるから、すでにエッチは何回もしてゐる。陽子も俺が求めると拒否しないのだ。いや、むしろ最近は積極的で、体が馴染み始めたみたいだ。

「本当にマネージャーするの？」

「なんで？」

「いや……、帰る時間とかズレるから……。」

「そんなこと言つたつて、大介の家つて高校からすぐじゃん！」

「まあ……」

いつの間にか俺達は名前で呼び合うようになつていた。  
俺的には  
名前で呼ばれた方が、なんだか心地よいのだ。

俺は親が離婚するのを知つてから、志望校を自転車で通える範囲

変えた理由は親の経済的負担を減らし、バイトをするためだ。電

車代も学割が効くとはいえた馬鹿にならないし、家から近いあの学校にして登下校の時間を減らし、確実にバイト出来る時間を確保したかったのだ。

「大介も何か部活入りなよ。できればバスケ入って欲しいけど…、なんか興味無いの？」

「うーん。部活に入るんだつたら、バイト増やすよ。」

「そつか…、」

「もしかんかの部活入つたら田移りしちゃうかもよ。ウチらの行く高校は女子が多いみたいだし。」

「田移り？」

「そう。あの子可愛いとかあつちの子は綺麗…とか思つかもしねないじやん！」

少しヤキモチを妬いて欲しくて言つたのだが、何も言つてこない…、返す言葉が見つからないのもしれない。

「冗談だよ。」

「…。」

「おこおこ…。」

陽子は今にも泣き出しそうな顔をしてた…。それを見て愛おしくなり、引き寄せ抱きしめてしまった。

「陽子……」

「うん……」

「好きだよ。」

「うん……」

まだ陽子から“好き”という言葉は数えるくらしきか聞けてない。だけど今は横にいてくれるだけで満足なのだ。

「ねえ……」

「何?」

「和代への言い訳考えてくれた?」

「あー、それ……」

正直考えてなかつた。でも隠すよりオープンにする事で打開出来ないものか?『付き合う事になつたから応援してくれよな!』つて、言つてみるか……?それとも付き合つてない振りして『俺、福島が好きなんだけど、相談乗つてよ!』的な感じでやつてみるか……。

どつちにしろ面倒臭かつた。でも少し間違えれば、陽子がイジメの対象になりかねない。親友の好きな子と付き合うというのは、裏切り行為になるだろ?。それだけで無視される可能性だつてあるのだ。

いつそ直江に彼氏でも出来れば万事上手いくのだが……ん……、  
どうか、誰か紹介すればいいのか……?でも誰を……?

一番始めに頭に浮かんだのがタカだった…。まあ、あいつは彼女とかいるのか…？俺はタカとその手の話をしたことがない…。

「ねえ、聞いてるの？」

「ん？ ああ、聞いてるよ。ちよつと考えてたら、よく分からなくなつてしま…。そつちは？ 何かいい案無い？」

「うん…。」

どうやら無いらしい。女の友情つて難しいからな…。でも彼氏を奪つた訳でもなし、深く考えなぐても大丈夫じゃないかな…？

「そついいえば涼子さん俺達の事なんか言つてなかつた？」

「うん…。あー、言つてた。」

「何て？」

「『モテそつだからしつかり掴んでおきなさいよー』だつて。」

「なんだよそれ。」

「『学校にいる子は先輩でも若い先生でもみんなライバルだと思わないよー』だつて。」

「それじゃ俺つて、すげえ浮気性の男みたいじゃん…。」

「そんな事じゃなくて、大介つてモテそつだし…私としても不安だよ…。」

「なんだかな～。」

なんだか複雑だ。誉められてるような、けなされてるような…。  
まあ、彼女なりのヤキモチだと思って、受け流せばいいのだろうけれど…。

「神田さんの息子さん大きいね。」

「体ばっかりでかくなつて、中身はまだまだ子供ですよ。」

「大介君だつけ？ 身長どのくらい？」

「187センチです。」

「187…。最近の子の成長はすごいな。」

入口付近にいたこのおじさんに親父のとここまで案内してもらつた  
のだ。そのおじさんにお礼を済ませ、携帯電話のコーナーに向かう  
と、

「大介！ 通信会社はK社の携帯な。ここのが比較的初期費用抑えら  
れるから。」

「分かつた。」

親父は感謝料代わりにあの家と土地の権利を母親に譲つた。後の  
支払いは看護主任をやつてる母親の給料でも払つていけるだろう。  
あとは俺の養育費だが、それは俺が大学卒業するまで続くそうだ。  
携帯各社の機能なんて分からぬ。だからデザインを重視して、  
あとは音楽を聴くのに特化したメーカーのを選んだ。その後の手続  
きは、カウンターの中の若いお姉さんがやつてくれた。

そして晴れて15歳にして携帯デビューを果たしたのだ。そして  
親父と一緒に出口を目指した。

「なあ、大介。」

「うん。」

「カウンターのお姉さんどうだった?」

「カウンターへさつき手続きしてくれたお姉さん?」

「ああ。」

「いや、特に不手際はなかつたけど……?」

「そうじやない。」

「じゃ、何?」

「いや、あー、うーん、実はあの子のお腹の中にお前の、弟か妹がいるんだ。」

「えつ?」

「振り向くな!」

そんな事言わても見たくてたまらなかつた。いや茶髪でイマドキの子だった。そんなことより、

「あの人いくつ?」

「ん……、22歳だ……。」

「22歳? あつ、えーと、親父って確か今年42歳だったよね。」

「ん…、わうだな…。」

「親父、その年の差は犯罪だよ。」

「そう言つなよ。」

「ちゃんと紹介してくれればよかつたのに。」

「そつか。いや…、彼女も…、お前から父親取つたから遠慮が多少あるみたいでな…、」

「俺と親父の関係は変わらないよ。」

「ありがと。大介にそう言つてもうらえると助かるよ。」

「産まれたら見に行つていいか聞いておいてよ。」

「分かつた。お母さんには余計な事言つなよ。」

「母さんお腹の子の事知らないの?」

「いや、お腹の子の事は知つてる。そつじやなくてお前が彼女と会つた事や、兄弟見に行く約束したとか…、」

「分かつた。それは言わないよ。」

「お母さんの事頼んだぞ。」

「「」の間から何回同じ事頼むんだよ。」

「いや…、そうだな。高校行つても勉強頑張るんだぞ。」

「分かつてるつて！」

俺はそう言つて親父と赤外線で番号とアドレス交換した。でも、そのやり方を知らない俺はただ見てるだけ…。そして俺は親父の職場をあとにした。

そして近くのファーストフードで取説見ながら自分で色々いじつてみた。バイト先の見竹さんも登録出来た。続いて見竹さんにメールしようとアドレスを呼び出すと、親父と見竹さんの他に“慶子”と登録してあるアドレスがある。なんだ？ 気持ち悪い。

見竹さんへのメールを一旦止め、登録してある慶子なる人物の情報を見てみようとすると、誰からか分からぬがメールを受信したのだ。

親父からか…？と思いつつ受信ボックスを開くと慶子なる人物からで、内容を読んでいくと、どうやら親父の新しい奥さんだという事が分かった。さつき受付しながら登録したのだろう。しかもメールの最後に“今度一人で会つて下さい。”と書いてあつた。

なんか腹黒い子だつたら嫌だなと思いつつ、なんとか返信を送つてみた。そして見竹さんにするはずだつた俺の初メールは、親父の新しい奥さんの慶子さんと終わってしまったのだ。

俺は入学前だというのに母親と高校に来ていた。校門から一歩中へ入ると、結構クラブ活動が活発だとわかるくらい、色々やつてるのが解る。だけど男子はテニスコートにいるだけで、見たところ他には見当たらない感じだ。

サッカーをやつているのはどうやら女子だ。女子サッカーか…、全国で何校くらい女子サッカー部つてあるんだろう…？その貴重な一校みたいだ。

バックネットで活動してのも明らかに野球部じゃなく、女子のソフトボール部のようだ。

それにトラックを走つてる女の子の数が40人くらいいる。交代で走るのか、それと同じくらいの人数がトラックの脇にいる。でも見た感じ陸上部っぽくない。いったい何部だろう？そんな疑問を持ちながらそれを見ると、

「大介行くわよ。」

「おひ。」

そして俺と母親は職員室へと入つていった。目的は苗字の変更の手続きだ。入試の時は前の苗字で受験した。で、今の苗字はとこと、母親の旧姓に変わったのだ。

母親いわく“途中から変わるのではなく、入学当初から変わつてた方が嫌な思いをしなくてすむ。”という事らしい。でも別に俺まで手続きにこなしてもよかつたんじゃね？と心の中で思つていた。

「では入学間際で申し訳ないのですが、よろしくお願ひします。」

「大丈夫ですよ。ところで神田君じゃなかつた…、若宮君は何かスポーツしてなかつたの？」

「え~と、バスケやつてました。」

「さうか。実は俺が今年からバスケ部男子の顧問をする予定なんだよ。練習参加のお知らせつて手紙行かなかつた？」

新学期からこの高校に異動してきた、この綿貫といつ先生は俺を羨望の眼差しで見てる気がする。

「手紙？あー、あつたみたいです。」

少しうまけてみた。

「休み中は忙しかつた？」

「いえ…、高校で部活に入るつもりないので。」

「なんで？勿体ない。お前なら…、」

お前なら？俺はあんたとまだそんなに仲良くないぞ！

「大学だつてスポーツ推薦で入れる素質ありそつだけだな。」

昔、空手の道場を辞める時も『勿体ない。』そんな事を言われたよな…。ん…？素質？体格だけ見て言つてるのか？

「高校でもやらないつもりですか、上でもやる気なんてないですよ。」

「そりゃ…。」

「先生質問いいすか。」

「なんだ？」

「グランジで走ってる女子つて何部ですか？」

「あ～、あれか。俺も昨日女子バスケの顧問に挨拶行つた時聞いたんだが、どうやらバレー部とバスケ部の新入生らしいぞ。体力作りつていうか、ふるいにかけてるのもあるみたいだな。」

「ふるいですか？」

「メインの体育館は2面あつて、女子バスケと女子バレーで毎日占拠してるんだ。だけどあの人数は入れないからな。」

「ふうん。えつ？男子は何処で練習してるんですか？」

「一応、古い体育館使つてるみたいだ。そつちはまだ見てきてないが1面しかコートが取れないらしい。それで、日曜日以外は男子バレーと日替わりで使つてるみたいだ。今週は月水金、来週は火木土つて具合だ。体育館が使えない時は、筋トレとか自主トレしてるみたいだけどな。」

「ふうん。男子は肩身狭いすね。」

「コートに立てるだけいいのさ、女子の3軍は男子の練習の後に1時間練習に来てるらしいし。」

「それまで待機ですか？」

「いや、屋上に金網張つてあるんだけど、そこにリングが4つあってシート練習してるみたいだ。それでも人数が溢れるから半分は交代で基礎体力向上のトレーニングをしてるらしい。」

なんて環境だ…、好きでこの強豪校に来た子もだらうじ、田の日をみないまま埋もれていく子もいるのか…。

それより高校の部活で3軍ってなんだよ？強豪校ってそんなもんなのか？

「他の高校行けば即レギュラーの子だつているんでしょ？」

「だらうじな。それに比べたら男子は恵まれてるぞ、一応体育館使えるしな。まあ、毎日練習はないし、6時には練習終りだし。」

「俺は応援する方でいいです。」

「そうか。まあ、強要はしないがな。」

直江は大変な環境にいるんだな…。陽子が2日で辞めたのが分かる気がする。3年生が引退した時に、監督の目に止まらないと、また1年下積みになつてしまふ可能性が高いそうだ。

その後、母親と綿貫さんが世間話をしていたが、興味のある話はなかつた。

俺はボールの弾む音と活氣のある声が聞こえる体育館の方が少し気になつていた。

「男子バスケは今日休みだつたみたいだな。」

「あれ？顧問なんでしょ？」『みたいだな。』なんて、ずいぶんと他人行儀な言い方するんすね？」

「新任だから入学式が終わつてからだ。」

「そつか…、」

この綿貫先生には、高校生活で何かとお世話になるみたいだが、それはまだ少し先の話…。

俺とタカは下駄箱のあるガラスのドアに張り出されたクラス表で自分の名前を探していた。

新入生の男女比は前年と変わらず1対3らしい。男子80人に対し女子が240人もいるのだ。男子の立場は弱そうだな……。

「1組から4組までは女子だけのクラスだな。」

「そうみたいだな。おっ、タカは7組か。やっぱり出席番号1番だぞ。」

「だな。」

他のクラスをアイ・ウエオ順で見ても、浅野より前の男子がいないという事は、タカの3年間出席番号1番が決定したということだ。

「おい、大介……お前の名前無いぞ……。」

「あるだろ。」

「ど二? 無いじゃん! 女子クラスの方に一人でいるとか?」

「あー、タカに言つて忘れてたんだけど、」

「何? どした?」

「いや、どうもしねえけど、先月親が離婚して母方の旧姓に先月から変わったから。」

「はあ？ マジ？」

「うん。」

「そつか…、知らなかつたよ…。」

「別にお前が落ち込む事じやねえだろ？」

「それもそつだけど…、で、大介は何組になつたんだ？」

「8。」

「8組か。えと、大介、大介…、おつ大島と同じクラスか…、あつた！若宮大介！若宮になつたんだ？」

「神田改め若宮だ。よろしくな。」

「おひ。」

「とこりで大島つて？」

「堀北中のガードだつた奴だよ。」

「あ～あ、あのやたら早くて上手い奴か？」

「そひ。あとセンターの加藤覚えてる？」

「名前まで覚えてないけど、顔見れば分かると思つよ。」

「あいつがいるから大介は新入生で2番目の『力さだな』」

「そんな情報はどうでもいいけど…。あいつは加藤って名前だったんだ…。」

「加藤は俺と同じクラスだな。」

「ふうん。ところでタカ、」

「何?」

「男子バスケの新入生は何人練習来てたんだ?」

「あれ? 大介入る気になつた?」

「違うけど。で、何人?」

「なんだよ…、来たのは3人だけだよ。それがどうした?」

「堀北の2人とタカだけ?」

「いや、俺以外に3人。」

「もう一人は?」

「小船中学つてとこの片山つて奴。」

「小船中…? 聞いた事ないな…、そいつ上手いの?」

「普通かな…。」

タ力が普通というくらいだから、タ力よりは下手なんだろ？」。

「先輩は？何人いた？」

「おーっ、やつぱり入る気になつたんじゃない？」

「別にそんなんじゃ……」

「そこに1年の担任が職員室から出てきて、教室に向かうと、教室に向かうと、さうして、声をかけてきた。

「おー、お前らー早く教室に入れークラス分からいのか？」

「すぐ行きます。」

よく見ると、昨日対応してくれた綿貫先生だった。

「大介、今日練習1時からなんだけど顔出せよ。」

「バイトだからバス。」

「そつかー、伊藤先輩が大介呼んでこいつて、つるをくても……。今一度一回顔出してよー俺の顔立てると思つて頼むよー。」

「伊藤先輩ね……。」

「そう。あと1回上の前島先輩と谷津先輩。」

「前島かー、ウチの中学のOBばっかじやん。」

「地元だから、いてもおかしくないよね。」

確かにそうだが、前島の名前を聞いて尚更行きたくなかった。前島には空手道場に通つてた頃、特に小学校低学年の時に随分やらされたもんだ。まあ、そのお陰で上達したので感謝しているが。それと2年前の……、

「考えとくよ。」

「頼んだ。」

もう一つ俺達は隣り合わせの教室へと別れていったのだ。

## 1.1 社交的（前書き）

どうも作者です。読んで頂きありがとうございます。これから主人公大介の高校生活が始まるので、サブキャラが多数出始めます。会話もならべく少人数（3人位まで…？）にするつもりですが、分かりやすく感じたら「ゴメンなさい」。では本文をどうぞ！

「遅れてすみません。」

小声でそう言いながら教室の後ろのドアから、入って行くと注目的だった。視線が集まる。俺は一つだけ空いている席目掛けて歩いていった。おそらくそこが俺の席だろう。

「若宮一。」

「はい。」

教壇に立っている、おそらく担任であろう人に名前を呼ばれ、そつちを見ると昨日対応してくれた綿貫さんだった。

「綿貫さん……、」

「お前が最後だぞ！」

「すみません。」

「早く座れ。」

「はい……。」

廊下側から男女交互の列になつてて、全部で6列あり、案の定俺の席は唯一空いてる、窓から2列目の1番後ろの席だった。なんか一番後ろの席をゲット出来たのは嬉しかった。苗字が変わらなかつたら、おそらく中途半端な席だったに違いない。

教壇では担任の自己紹介のあと、入学式の簡単な流れを説明している。途中から7組と8組の副担任をしている平戸先生の話をしたが、その方はまだ隣のクラスにいるようだ。

そして『時間になつたら放送があるので、その指示に従つて体育馆に来るよう』。と、言つて綿貫さんは出て行つた。

みんな緊張からか誰も喋らず静かにしている。そんな中、隣に座つていた女子に話かけられた。

「あの～。」

「俺？」

「はい。」

「なんでしょ？」

「あなたつてバスケやつてませんでした？」

「はあ…、やつてたけど…、」

「ですよね。あのつ、私、北見中学でバスケやつてた渡辺つていいます。」

「どうも、若宮です。」

「いや～、そうですか。」この高校でしたか…。」

「俺つて…、」

『俺つて県内のバスケットだと有名なの?』って聞こうとして止め

た。だけど、この渡辺さんは、

「はい。有名でした。」

「そう…。」

「なんていつも、中学の公式戦でダンクしてる人なんて、県内で1人しかいませんから。」

「そういうこと…。」

確かにウチらの試合はギャラリーが多くつた気がする。それにダンクの度に歓声が上がつてたし…、ダンクを見たかったのか…。

「同じクラスで、しかも隣の席なんて光栄です。」

「はあ…。」

回りをよく見ると、誰も話して無い中で、話し出したウチらに、クラス全員が聞き耳を立ててるようにも感じた。

それを遠くで聞いてた人物が、痺れを切らしたらしく自分の席から俺の席へとやってきたのだ。みんな座ってる中、立ち上がつたのだから普通に目についた。

「あれ…、」

見た事ある…。」いつがタカが言つてた大島か…？

「はい?」

「あーーーっ！」

「」の渡辺さんはじつはひむとこ。

「あなたは堀北中学の大島君じゃないですかー。」

「どうも。でも、もうあなたと同じ高校生だよ。」

「すみません…。」

「浅野に聞いたんだけど、バスケやらないんだって？」

大島と視線が合つ。どこつもこいつも馴れ馴れしい…。社交的つて言つた方がいいのか？

「やうだね。そのつもりだけど。」

「えー！ なんで勿体ない！」

渡辺さんはいちいちリアクションしなくてもいいのに…。

「一緒に全国田植セイバレー！」

全国？週に3回くらいしか活動しないクラブが？そんな簡単じゃないだろ！

でも全国つてのは、いい響きだ。堀北に勝つてたらおそらく俺らが、全国大会への切符を手にしてたに違いない。あの試合が事实上の決勝だった。

「ウチの学校からじや無理だろ。圧倒的に女子部の方が優遇されて

るし。体育館使える日も限られてるんだろ?」

「詳しいな。それってバスケに未練あるからか?」

チツーこの大島つて野郎は俺を煽つてるとか?嫌な野郎だ。

「かもな。でも俺は君達が全国行けるよう応援する方に回るよ。」

「神田の力が必要だ。」

「な……?」

誰かに『必要だ。』なんて言われたのは初めてだった。

「バスケやるようこ考え直してくれよ。神田の力が……」

「人違ひじやないか?俺の名前は若宮だ。先生もそう言つてただろ  
?」

「あれつ……?いや……だつてお前は……」

「えー違うの?ダンクしてた人にそつくりだけビ……」

渡辺さんは、ちょいちょい会話に入つてくる。いや、先に話していたのは俺と渡辺さんだった。

「そつか……人違いか……いや……名前を覚え間違えてたかな……?」

タイミング悪い事にそこにタガが入つてきた。しかも後ろには俺と変わらないくらいデカイ奴もいる。堀北のセンターだ。こいつは

マッチアップしたから、なんとなく顔を覚えてる。

「大介！」

大島がタ力を見て、

「あつ、浅野に加藤！いいとこ来た！」

それであつさり俺が“元神田”という事がバレてしまった。それにいつしか俺達の席の回りには、このクラスの女子バスケ部員まで集まり出していた。なんだ？俺の机はお前らの交流の場じゃないぞ！

「つまらない…。校長と来賓代表の挨拶が終わつたあと、担任と副担任の紹介があり、簡単な自己紹介が始まつたのだ。そして綿貫さんの番がきた。

「只今、紹介に与りました8組の担任をさせて頂きます綿貫と申します。教科は保健体育になつてます。私もこの4月から、この高校に移つて来たばかりで、分からぬ事もありますがよろしくお願ひします。あと男子バスケ部の顧問も担当する事になつてます。」

と、さつき教室で話した内容となんら変わらない感じだつた。副担任の平戸さんは今年2年目の美術の教師だ。

俺は選択教科の音楽・書道・美術の中から、この副担任の美術を選択している。平戸さんが転勤しない限り、3年間この人に美術を教わるのだ。

さつきの挨拶の時は全員立つていたのだが、女子が多いのもあってか、俺は頭一つ出ている。あぐびでもしようなら目立つてしまつたのだ。それはあの加藤つて奴も同じだ。高校1年で180センチ後半なんて、スポーツをするには恵まれ過ぎだ。でも俺はそれを放棄するつもりなのだ。

他にもそこそこデカイのは何人かいるのだが、ウチらほどではない。ちょっと気になつたのがタ力のクラスの女の子だつた。俺らほどないが180センチは確実にありそうだ。

まあ、最近の全日本の女子バレー・ボールをみても、このサイズの日本人女性を見る事は珍しくないから別にいいのだが、流石に近くで見ると俺でも威圧感を感じる。中学の県大会で見た事がないから、バレーか他のクラブだろ？

「若宮君。」

なんでこの渡辺さんは話好きなんだろ?... へ田立つ俺が喋ると、先生に目を付けられるから嫌なんだけど...、

「何? 今じゃなきゃダメな話?」

「え? あー、うんとね、」

この子は俺の気持ちを汲み取ってくれない...、この怒りは、どうにぶつけたらいいんだ!

「隣のクラスの背の高い女の子いるでしょ?」

「ああ。」

「あの子、他県で有名だった子なんだよ。」

他県? 有名?

「なんだ?」

「全日本候補に入つて、選考合宿に行つた経験あるんだつてー。」

確かに全日本の女子バレーは、たまにサプライズ的に若い子をメンバーに入れてくる。実力があれば入れても別にいいだろ?。それに将来的に育てたければ、レベルの高い環境を『えるのも必要だ。

「すごいね。」

「でしょ？多分ウチのバスケ部でも一年からレギュラーいけるんじやないかな？」

「えっ？バス…、」

思わず大きい声を出してしまった。間髪入れずに『そいつ！静かに！』と、だから声が上がってくる。

絶対、注目されてる。生徒達からの視線は別にいいが、先生達からの視線が痛かった。陽子にも見られたかな…。格好悪いな…。

式も終わり教室に戻るのに、ウチら8組は最後に体育館を出る事になり、そうなると一番最後に体育館を出る新入生は、俺と渡辺さんだった。

新入生退場の時に陽子を探したら、意外と早く見付かって1組だった。陽子の何人か前には直江の姿も有り、どうやら同じクラスらしい。その後も人間観察をしていくと、チラホラ可愛い子や綺麗系の子が目についた。

そして『7組起立。』となつて、あの子に視線をやると意外と綺麗な顔立ちだ…、線も細い…？いや、化粧をすればモデルでも出来そうな感じだ。

「綺麗だよね…。」

横で渡辺さんが呟いてる。同性の彼女からみても、男の俺と同じように感じるみたいだ。

「8組起立！」

よつやく退屈な式から解放されたのだ。

俺は家から学校が近い事もあって、どうせ家で家を出る傾向にあるみたいだ。夕力といえば、朝からショート練習をしにいくとかで、一緒に登校するのは昨日だけで終わるらしい。俺的にはその方が気が楽ありがたい。

教室の前まで着くと、廊下で話してる生徒が結構いる。上履きの色を見ると上級生が半分くらいいるみたいだ。この学校は上履きの色で学年を区別してるのだ。

席に着くと渡辺さんに話しかけてきた。なんでも、上級生が自分の中学の後輩を中心に、部活の勧誘に来てるみたいだ。

「成る程ね。」

「そういえば、さつき『神田君いない?』って男バスのマネージャーが探しに来てたよ。」

「マネージャー?」

「そう。他の部も勧誘しまくってるよ。廊下に結構人いたでしょ?」

「あー上級生っぽい人達のこと?」

「うん。それに多分だけど、マネージャーの中でも一番可愛い子連れてきてるんじゃないかな?」

「可愛い子?」

「新入生1人に對して、その中学の先輩と可愛い系のマネージャーが1人は來てるよ。」

「えっ？ そりなの？」

「色仕掛け？ 高校生の発想じゃないな。」

「そうだよ。あの後ろのドアから見える人達って、坊主頭だから野球部だらうけど、あのままだと入部決定だよね。」

「野球部あるんだ？」

「みたいよ。活動場所は校内じゃなくて、運動公園の球場借りてるみたいだけどね。」

「へへ。野球部つて9人以上いるんだ。」

「いなかから勧誘してるのかもよ。」

「そつか、そつかもね。」

「あつ、又來た！」

「ん？ 何が？」

「さつさつと來つてた男バスのマネージャーさんー。」

「マジ？ 」

そう言つて入口の方に振り返ろうと思つたが、俺は渡辺さんの方

を向いたまま振り向くなかった。

「入ってきた。」

「嘘？」

「」

「…。」

すでに後ろに気配を感じた。俺は口パクで“いる?”と渡辺さんに聞いたら、静かに頷いた。意を決して振り向くと、俺のよく見知った懐かしい顔が立っていた。

「大介探したよー。しかも苗字変わつてるとは思わなかつた。浅野に確認しに行つちやつたよ。」

「久し振り…。」

「そうだね、久し振りだね。」

俺の1つ上の先輩で、お互いの初めての相手…。要は、俺のファーストキスも俺の童貞も捧げた相手がこの人なのだ。付き合つてたわけじゃないけど、ノリで何回かしてしまつた…。

言い訳するわけではないが、始めに誘つたのは有紀姉の方からだつた。バージンから早目に卒業したい年齢だつたのかもしれない。当時有紀姉は、ウチの隣のアパートに住んでいたが、有紀姉ん家が近くに建て売りの物件を買つたとかで引越したのだ。

母親同士が古くからの友達で、更にお互い看護士で職場までもが一緒だつた。それでどちらかの母親が夜勤でいない時などは、お互

いの家に夕飯を』馳走になつたりしていたのだ。

「春休みの練習スケジュール表入つた手紙行かなかつた?」

「きてた。でも俺がやらない事タカから…、浅野から聞いてるんだ  
る?」

「本氣でやらないつもり?」

「まあ…、」

「やりなよ。伊藤先輩も楽しみにしてるよ。」

「…。」

「谷津も前島もいるし。」

また前島の名前が出た。でも、そのつづきつと顔合わぬな…。  
出来れば見たくなかった。

そこに担任の綿貫が出席を取りにきて『お前ら席に着け~。』と  
言つてゐる。

「大介また、来るから。」

やう言つてドアに向かつて行くと、手前で振り向いた。

「入んなきゃダメだからね!」

そう叫んで出ていつた。夕カから入らぬって事は聞いてるだろ

！つて叫び返してやりたくなつたが、『起立』の声がかかり止めといた。

「あの先輩と仲いいの？」

「うん？」

「いや、タメ口だつたからや。」

「ああ、昔近所に住んでた。」

「幼なじみみたいな感じ？」

「そうだね。」

そこには当然濁しておいた。幼なじみは幼なじみなんだうつむき“エッチした仲”なんて言える訳ない。

ん…？待てよ…、有紀姉が男バスのマネージャーって事は、今の彼女の陽子と一緒にいるって事？もしかして女同士だと仲良くなつたら喋つちゃう？ヤバイかな…？有紀姉に喋らなによつて口止めしないと…。

入学前の俺の携帯電話のメモリーは、両親と陽子と見竹さんに店長、それと親父の新しい奥さんの慶子さんの6件だけだった。

それがタ力に教えたばかりに、有紀姉を始め男バスメンバーからの勧誘メールが度々入ってくるのだ。伊藤先輩と堀北中出身の大島と加藤からもくる。不本意だが、誰からのメールが分かるようにこのメンバーも登録する事にしたのだ。

あとのクラスメイト数人とも交換している。その赤外線で情報交換する度に、横に座つての渡辺さんも交換したそうにしてるのだ。でも向こうから言つてこない限り、俺の携帯に渡辺さんの電話番号が登録される事はないだろう。

「よーし、お前らもたもたするな！」

「はーい…。」

4月の体育の授業は短距離のトラック競技だった。100メートル走と110メートルハードル、それに走り幅跳びの記録を計るというのだ。

ウチのクラスは隣の7組との合同での体育なので、タ力も一緒に授業を受けてる。

「大介！俺と勝負しようぜ！」

「長距離だと勝てる気しないけど、短距離じゃ、負けねえよ。」

「よしー！だつたら一つでも俺が勝つたら、バスケ部入れよなー！」

「なんでもうなるんだよ？」トトが勝つたら、なんかメリットあるわけ？」

「うへん…、名誉…！？」

「そんな勝負乗れないね。メリット一つない賭けに乗る奴なんていなじよ。」

「負けるのが怖いんだろ？」

「タカ…、今のお前つて、小学生並だぞ…。」

「うへ…、」

中学時代の3年間、3つの競技で同じ年の陸上部よりいい記録を出し続けた俺は、学年トップのポテンシャルの持ち主だった。だからタ力に負ける気など全くなかつた。

「だつたら、ウチの加藤が大介に勝つ！」

加藤か…。体格的には俺と変わらないが、俊敏性はどう? ジャンプ力だけはとにかくあるのは間違いないけど。

「俺なら遅いぞ。」

横にいた加藤があつさつと言つてしまつた。タカが残念そうな顔をしたのは言つまでもない。

女子の体育はハンドボールみたいで、トトックの方じゃなく、狭い方のグラウンドでゲーム形式でやつていた。中でも目立つのが、あの背の高いモデル系の女の子だ。

渡辺さん情報によると、1年生で唯一1軍に抜擢され、それどころかレギュラーメンバーに選ばれたらしいのだ。全日本の選考合宿に参加するくらいなんだから、そのくらい当たり前だらうけど…。

「大介。何見てんだ？」

「ん…？」

「女の尻か？」

「お前と一緒にすんなよ！」

「見てねーし…」

「そうだ！タカって彼女いるのか？」

「なつ、なんだよ突然！？」

「何びっくりしてんだよ？世間話だよ。世間話。」

「突然そんなの聞かれたらびっくりするだろ？が！」

「タカさー、お前を男と見込んで、あとで相談あるんだけど、時間作ってくれない？」

「ん？え？まさかお前、好きな子でも出来た？」

「違うよ。後で話す。」

「分かった…。」

的違いで残念そうだったが“男と見込んで”つてフレーズが効いたみたいで、なんだか誇らしげだ。

勝手にアドレスを教えた事を怒りうつとか、そういう事ではなく、棚上げのままのあの問題について、一役買つてくれないかの相談だつた。

この日は俺のバイトが休みで、男子バスケ部が体育館を使えない自主練の日なので、放課後タカにはウチに来てもらつた。

「で、なんだ相談つて？」

「タカは好きな奴とかいないの？」

「まさか！？大介つて、そつち系だったの？」

「そつち系？」

「いや…、男が好きつて奴？つまり俺が狙われてる…？」

ブツ！俺は飲みかけたコーヒーを口から少し噴いてしまつた。

「馬鹿か！？そりじゃねえよ！腹割つて話せない奴に、相談するのが嫌だつただけ…。だからちよつと試しただけだよ。」

「たつ、試すなよ！」

「悪かった。で、いるの？いないの？」

こんな感じで言われたら、いくらタカでも言つだろ？。

「大介はどうなんだよ？」

「だから、それを相談するためにタカの腹積もりを聞いてるんだろ？」

「うう…。」

口が軽いこいつからは、質草を取つておくに限る。さあ、タカ言つてしまえ！

## 15 タ力の好きな人

タ力はゆっくりと自分の好きな子の事を話し始めた。

「誰にも言つなよ。」

口の軽いタ力に言われたくない。

「分かつた。」

「前に、直江が大介の事好きなのは話したよな。」

「うん。」

「そもそも、なんでそんな話を俺が知つてたかっていうと、前から直江に少し興味あって、どんな奴がタイプか知りたかったから、抽選会の時聞いたんだよ。」

「じゃ、タ力は直江なんだ？」

「う…まあ、そうなんだけど…。だけど、話していくうちに直江が『実は神田君みたいな人がタイプなんだよね。』って言つわけさ。それって残酷じゃね？」

「そつか…。でも『タイプ』って言つただけで『好き』って言つた訳じゃないんだろ？」

「同じ事だろ？」

「ん…」

「えつ…まさかお前、この間俺があんな事言つたから、直江の事  
気になりだしたとか？」

「違うよ。」

「この展開なら話してもいいか…。」

「そんな全力で否定しなくてもいいじゃん…。」

「悪い…。実は俺、この間から福島陽子と付き合つてだしたんだ。」

「えつ…え――――――つ…。」

「そんなに驚く事ないだろ？」

「こつ? こつから?」

「こつからつて、タカが春休みにウチに来ただろ?」

「うそうそ。」

「あのあとへらいからだよ。」

「マジ?」

「マジ。ここで相談なんだけど、直江に上手へ話つて欲しいんだ  
よ。」

「上手く?」

「そう上手く。いや、だから陽子も女同士で誰がタイプみたいな話してたみたいで、直江が俺みたいのがタイプって言つてたの聞いてた訳じやん?」

「まあ……。」

「だから陽子も直江に対して気まずいわけよ。」

「気まずい?」

「だから……、もしタカが好きって公言してた子を、友達が搔つ攫つたら嫌だろ?」

「だな……。」

「それと同じだよ。」

「うーん。断るー。」

「なんで?」

「大介、よく考えてみろよ。俺だつたら第三者に聞くより、友達本人から言われた方が気持ちがいいけどな。それに、言えないってのは友達じやねえよー。」

「うう……、確かに……。」

「だろ? 時間がある時に、福島から直接直江に言つた方がいいよ。」

「うふ……、分かつた……。」

「でもあれだな、お前と福島が付き合つとまね……、」

「なんだよ。悪いかよ?」

「なんて書つて呟つた?」

「いや、普通に『俺と付き合わない?』的な感じだよ。」

「ふうん。でも彼女か……、いいな~。」

「直江に告白すれば?」

「俺が?」

「他に誰がいるんだよ?」

「嫌だよ。」

「何で?」

「そりゃ……、あいつはお前の事が好きだったんだぜ?、せこい。」

「俺には彼女いるし。」

「まあ、やうなんだがどぞ……。」

「やつだ、今度ダブルデータあるか？」

「はあ？ やめてくれよ。」

「何で？ きつかけあつた方がいいだろ？」

「ん、うん…。」

「どうやら内心では、きつかけが欲しいらしい。」

「よし、直江に俺と付き合つての報告したら、やつをやつ方向に持つていくから、心の準備しどけよ。」

「わっ、分かった。」

「ちやんと分かったのか？ 告白するんだからな？」

「なんでもうなんだよ？」

「いいじやん！ 一人きつくなるタイミング作るからさ。」

「マジかよ…。」

「まつ、告白ないはタカの自由だけどな。」

「う、うん…、考えとくよ…。」

「あー、やつだ。俺達が付き合つてゐる事は、陽子が直江に話すまで絶対内緒しといてくれよー。」

「ん？」

「もし喋ったたら、お前が直江を好きな事を言つて触らすからなー。」

「分かつたよ。言わねえよ……。」

「よし。」

直江には陽子に直接言わせる事にして、あとは有紀姉の方だな……。

「こりひしゃこませー。」

駅前とこつ事で、「」の「」屋はそこそこ繁盛してゐる。仕事中は中々雑談をする暇がないのだ。それでもたまには間が開く事もある。

「見竹さん、聞いていいですか？」

「何？」

「「」の「」聞いてた、店長がちよつかい出してたんで、ビの娘ですか？」

「そんなの聞いてどうするの？」

「いや、別に聞いてみたかっただけです。」

「知らないでもいいんじゃない？」

「もしかして複数いるんですか？」

「まあね。」

「マジですか？」

見竹さんが頷いてゐる。

「神田君……、じゃなかつた若宮君、無駄口叩いてる暇あつたらダスターでテーブル拭いてきてー！」

「はー…。」

「あとダストボックスの中も見て、一杯だつたら新しいのと変えてきてね。」

「はー…。」

ていうか、教えてくれてもいいじゃん…、別に店長本人がいるわけでもあるまいし…。ん…、まさか今いるバイトの中にその相手がいるとか…？今いるのは新田さんと…汎子さん…。

もし汎子さんに手を出したら、店長でも半殺しにしないとダメだな…。

そこに自動ドアが開いたので『いらっしゃいませ。』と声をかけたら、俺の知ってる顔だ。

キッ口キッ口と辺りを見渡すと、俺を見つけて近寄ってきた。

「大介ー…話つて何?」

「明日書いとひたろ?」

「メールでね。でも気になるじゃん?」

「今、バイト中だから。」

「何時に終わるの?」

「10時。」

「まだ3時間以上あるじゃん！しかもそんな遅くまで待つてらんな  
いし。」

「終わつたら電話するよ。」

「ん~、別に明日学校でもいいけど。」

そんな不特定多数がいる場所じゃ無理だ。それに、ならべく一人  
の状況がいい…。

「あ~汎子先輩~。」

「あ~、おい。」

しまつた。一人は男子バスケのマネージャーの先輩後輩の仲だつ  
た。

何やら『久しぶりです~。』的なやり取りをしている。その一人  
の中に入る事も出来ず、俺はダストボックスタスのビニール袋の交換を  
急いで仕上げた。

そして、ゴミ袋を店の裏の所定の場所に置き、店内に戻ると有紀  
姉は帰つたらしく、すでに見当たらなかつた。

「せつしきの子、彼女？」

「ちつ、違いますよ。」

「あらそつなの？でも『大介』って下の名前で呼んでたよ。」

「昔近所に住んでて、ガキの頃よく遊んだんですよ。」

「ふうん。」

「もしよかつたら見竹さんも『大介』って呼んでもらっても構わないですよ。」

「私の立場で出来るわけないでしょーーー？」

「そうですか…。」

見竹さんは意外と堅い人なのか？

冴子さんとシフトが同じ日は、決まって一緒に帰るのが習慣にな  
りつつある。大学生の冴子さんの服装はカジュアルな感じで可愛く  
まとまってる。金がなくて、私服の少ない今の俺は学生服姿だ。

「ねえ大介君。」

いつの間にか、俺の呼び名は苗字から名前へと変わったのだ。お  
そらく陽子が自宅で冴子さんと話す時に『大介』と呼んでいて、そ  
れが耳慣れしたのだろう。

「なんでしょう？」

「有紀ちゃん」と仲いいみたいね？」

「えつ？まあ、幼なじみみたいのですから。」

「 さうなの？」

「いやだな…、なんすか？」

「いや、あの娘、色田使つの上手こらじこから。」

「色田？」

「ウチらの中では小悪魔的存在だったのよ。」

「小悪魔ですか？」

「私の友達が、あの子に彼氏取られたって言つてたし、他の子なんかは取られてなくとも一回あの子と寝たとか、色々噂になつててさ

…。」

「マジで？」

「取つたって言い分は、ちょっと違うか…、結局アプローチしていくのは男の方だもんね…。」

「…。」

「でも私の友達は『あの子に彼氏取られた』って確實に言つてた。あとは『またあの娘じゃない?』みたいな噂話だし…、」

有紀姉がそんな尻軽女みたいに言われてるのは、なんか嫌だった。それは本当なんだろうか…?

「大介君。」

「はい。」

「陽子泣かせるような事しないでね。」

「もちろんです。」

泣かせるようなことはしないつもりだ。だから有紀姉にも余計な事を喋らないように、口止めするつもりでメールしておいたのだ。それについても有紀姉がそんな風に言われてるなんて、大丈夫なのかな…？

「もしもし有紀姉？」

「大介遅いよー待ちくたびれたよー。」

「悪い…。」

「で、話つて？」

「あのわ、汎子さんの妹の陽子の話なんだけどさ。」

「陽子ちゃん？陽子ちゃんがどうしたの？」

「実は今、俺と付き合つてるんだ。」

「…。」

「もしもし？有紀姉聞いてる？」

「あー、聞こえてるよ。そ、うなんだ。陽子ちゃん可愛いもんね。」

「でさ、俺達の事言つてないよね？そ、な、なんて言つが…、昔…、エッチしたとか…体の関係があつたなんて…、」

「バツ、バカ！言つわけないでしょ？いくら同じ部活のマネージャーつていつても、まだそんな事言つてえんほど、打ち解け合つてなわよー。」

「よかつた…、って打ち解け合つたら直つのかなよー。」

「言わないつて…。いちいち揚げ足とらないでよー。」

「わっ、悪い…。」

「でも、そんな事心配してたんだ？」

「そりや…、付き合い始めたばかりだし、余計な心配かけたくないしね。」

「男だねえ…。」

「それと、ひょっと事情があつてまだ付き合つてる事公表してないから、しばらく黙つてくれないかな？」

「…。」

「有紀姉？聞いてる？」

「黙つて欲しかつたら、バスケ部入りなよ。」

「脅すなよ。俺の知つてる有紀姉は、俺が入部しなくても裏切るような奴じやないだろ？」

「…。」

「有紀姉？」

「分かつたわよ。」

「そう。よかつた。そうだ有紀姉は今彼氏いるの？」

「…。」

「おーい？有紀姉？」

「あつ…、あのさ…、そのうち大介も耳にするかもしれないから先に言つておくけど、私つて『魔性の女』って言われてて…、」

魔性の女？小悪魔じゃなかつたのか？でもそんなに変わらないか  
…？

「なんていうか…、」

「俺は誰かに何か聞いても有紀姉を信じるよ。」

「大介…。」

「言わなくていいよ…、たとえ、有紀姉が不倫してようが、一股三股してようが、援交してようが、俺は有紀姉の味方だから。」

「なつ…？」

「ん…？言い返さない…。普通なら、こには否定するよな…、つて事はどうかは当たつてるつて事？まさか“味方”って言葉に感動してるとか…？」

「ありがとう大介。でもバスケ部には入りなよ。」

「だから、入らないって！」

「いいの～？ そのうち陽子ちゃん、誰かにやられちゃうかも～。」

「えつ！ 何それ？ 誰かに言い寄られたとか？」

「はつまつは分からぬけど、あの様子だと、相当嫉妬しているね？」

「一年？」

「前島。」

「まえつー？」

前島の野郎…。

「陽子ちゃんって可愛いから、前島じゃなくても声かかりそうだけどね。」

「他にもいるの？」

「どうだろ？」

「…。」

「大介が入部して守つてあげなよ。」

「陽子辞めさせる。確か今月一杯は仮入部期間だよね？」

「本人が辞めないって言つたら?」

「その時は…、」

「別れるのは選択肢にないんでしょう?なら入部だね。」

「…。」

「みんな待つてるよ~、大介が入つてくるの。」

「…。」

「大介?」

「陽子に聞いて、辞めないって言つたら、バイト先に相談してみるよ。」

「そう」なくちゃ!」

くそー。前島の野郎だけには指一本触れさせねえ!

それで電話は切つたのだが、結局有紀姉に彼氏がいるのかいないのかを聞きそびれてしまった…。

俺は入学してから10日もしないウチに、入るつもりのなかつたバスケ部に入る事にしたのだ。とても不本意…。

有紀姉の電話を切つたあと、直ぐさま陽子に電話して『男子のマネージャーじゃなくて他の部活に入れよー』と、時間かけて説得したが、結構頑固で辞める気がないそうだ。

「バスケに携わつてたくて…。」

女子部のマネージャーは、選手を2日で辞めたこともあつてやりたくないそうだ。で、結局俺がバスケ部に入るはめに…。ただし、バイト優先という条件付きで！

それと直江には、俺と付き合ひだした事をちゃんと報告出来たみたいだ。

「向こうから告白してくれたんだつたら、仕方ないかな…。でも、おめでとつーよかつたじやん！」

と同時に俺の事を諦めてくれたらうし。でもタカとのダブルティーの話は言つてないようだ。まあ、話の流れからいふと無理だよな…。

「あれつ？若宮君今日荷物多いね？」

「ん…？ああ、そうだね。」

「これってバッショのケースじゃない？」

「ん？ ああ、そうだけど……。」

渡辺さんは結構田代といのか、なにかと指摘されることが多い。

「つて事はやっぱりやる気になつたの？」

「たまにね。運動不足解消程度に。」

そこに時間ぎりぎりで教室に入ってきた、大島が近寄ってきた。こいつもタ力同様、朝練でシユートでも打つてるのか？

「おー、若宮ー…とつとう入る気になつたか？」

俺がバッショのケースを持つてゐるのを田代とく見付け、俺の肩を揉みながら嬉しそうにそつとつのだ。

「大島痛いよ。」

「おつ、悪い悪い。で、入るんだよな？バスケ部？」

「まあ、家庭の事情もあるから、バイト優先ではあるけど、それでもよければ入るうと思つてる。」

「よしー認めるー…そつか、入ってくれるかー。」

俺の言葉を聞いて、大島がメールを打ち始めた。

「おい、大島、誰にメールしてんだ？」

「えつ？誰について…、みんなに…、「

「みんな？」

「みんなに一斉メールだよ。」

「いや、だからみんなって誰？」

「浅野に加藤に片山、桜井、中西。」

片山までは聞いた事あるな…。

「「」のあとはに柏木先輩とかにも送る予定だし。」

「何人に送るんだよ？」

まつたく…、そう思つて、ふと渡辺さんの方を向くと、渡辺さんまでメールを打ちまくつてる…。もしもし、渡辺さん…？あんたは誰に送信してるの？

そして、隣の教室のドアが乱暴に開いた音が聞こえたかと思つたら、廊下を走る音がして、ウチの教室の後ろのドアからタカが入つてきた。

「大介！お前つて奴は！」

どうやら大島からのメールを見たタカが、事の真意を確かめにきたようだ。

「よひ、浅野！あとで千円だからな！加藤にも言つておいてくれよ

！」

ん？千円？

「もしかしてお前ら俺が入部するしないで賭けてたんか？」

「ん…、まあ…。でも入ってくれるんだろ？」

「まあ…、」

「だつたら千円なんて痛くない。」

「つていうか、大島以外は誰が勝つたんだ？」

「なんで？」

「いや…、俺のお陰で勝つたんだから、学食でA定食くらい奢つてもうむうかと思つて！」

「あー、もちろん奢るよ。1年は俺の一人勝ちで、先輩方は先輩方でやつてるはずだけど、多分柏木さんの一人勝ちのはずだよ。」

有紀姉？あんにやろ！

「今月中に入部してくれなかつたら、俺は5千円マイナスだつたら、危なかつたよ。ありがとな若宮。」

「それより本当に入部するんだよな？」

「だからバイト優先だけどな！」

「よつしゃー！」

「浅野、そんな喜んでいいのか？」

「何が？」

「先輩方に『本人が入らないって言ってたから、絶対固いです。』とか言ってたじゃん！ガセネタつかまれたって、練習でしごかれんじゃね？」

「ゲツ！」

それはないだろうけど、結構言われるのは間違いない。

それより久々にボールに触れるからか、放課後になるのが待ち遠しかった。

「1年8組若宮大介入ります。」

「おつ、大介待つてたよ。」

「失礼します。先輩」無沙汰してます。」

「そんなとこいないで中入れよ。」

「はい。」

部室を見渡すと伊藤先輩と谷津先輩と前島の糞野郎がいた。他にも知らない顔が何人かいる。1年もいるみたいだ。

「お前ん家、親離婚したんだって？」

「はい。ですからバイトして家計の負担減らさないといけないんで…」

「聞いてる。バイト優先だろ？」

「はい。」

「それでいいよ。」

「すみません。」

「ただし、公式戦だけはちゃんと来てくれよな？」

「はい。それはもちろん。」

「今日から参加するんだろ?」

「はい。よろしくお願ひします。」

「おう。ロッカーは空いてるといつてくれ。」

「はい。」

「一応紹介しようと、3年が俺と大迫。」

「よろしくな。」

大迫さんは温和な感じの人だ。

「よろしくお願いします。」

「2年は…、前島と谷津は知ってるよな。」

「はい。」

「あとは幽霊部員みたいので、試合の時とか、気の向いた時にしか練習に来ない高橋つてのがいるんだけど…、おい前島!」

「はい。」

「今日、高橋出るって言つてたか?」

「いや、聞いてないです。でも多分バイトじゃないですか？」

「やうか…。1年は…、浅野…」

「はい。」

「1年とマネージャーはお前があとで教えておけ。」

「分かりました。」

「なんか質問あるか？」

「2・3年生は全部で5人ですか？」

「そうだ。試合になつたら退場出来ないから、3月まで大変だったよ。」

酷いチーム状況だな…、

「やうですか…。」

「あとは無いか？」

「質問じゃないんですが、いいですか？」

「おつ、なんだ？」

「実はマネージャーの福島と付き合つてます。」

「何？」

回りにいた人間は、一瞬何が起きたか分からぬ感じで、時が止まつた様に静かになつた。着替えの手を止めた奴さえいる。

「本当か？」

「はい。一応報告です。」

「みんな聞いたか？カツブル1号な！」

「マジかよ……。」

「どうした前島？」

「えつ？いや、なんでもないです。」

「そうか。じゃ、ひとつと着替えて体育館行くぞ！」

「はい。」

前島はガチでがつかりしてた。それにしても先輩方は、中学卒業後そんなに身長が伸びてないのか、俺より10センチ以上低かった。これじゃ、やっぱり弱いよな。

体育館に向かうと、中からダム、ダム、ヒボールの弾む音が聞こえる。

「マネージャーが先来てるの？」

「いや、違うと思つよ。」

「じゃ、誰? わざわざ言つた高橋先輩とか?」

「それも無いな…。」

それ以上聞くのを止めた。行つてみれば分かることだ。そしてそれが顧問の綿貫さんだと分かった。

「おー、お前ら遅いぞ!」

「バスピアンなんか履いてどうしたんですか?」

「ん? 僕も一緒に体動かそうと思つて。」

「マジですか? 先生いくつですか?」

「馬鹿にするな! まだ29歳だ。まだお前らに負けないくらこは動けるぞ!」

「ケガだけはしないで下さいね。」

「だな。」

「先生上手ですか?」

「ん~、高校時代は上手いと思ってたよ。」

「『高校時代は』って、微妙な言い方ですね?」

「大学で鼻へし折られたよ。体力も自信あつたけど、上には上がり  
るってね。」

「そりなんだ…。」

「加藤も『カイけど、やつぱり若富も『カイな。』」

「先生、『コイツ準決で俺らに負けたくせに、最後の大会、得点王だ  
ったんですよ。』」

「ほあ～つ。1試合少なくて得点王はすごいな。」

「その試合でマークしてたのが加藤なんんですけど、若富一人に40  
点以上やられたんですよ。」

「そりだつけ？」

「嫌な事思い出させるなよ。」

横でバッショを履いてた加藤が暗くなつてた。

「若富のワンマンチームだつたのか？」

「いや、もう一人。外から入れる奴がいたんですけど…、えーと…、  
あつ、あそこでマネージャーと話してる奴です。」

「浅野か？」

「奴のスリーは凄いすよ。かなり遠目からでも打つてきますし、そ

れにモーションが早い。」

「それは何度か練習見てるから知ってる。でもお前達が勝ったんだろ?」

「まあ、ウチは若宮のとこと違つて選手層厚くて、みんな平均的に点取れましたし、俺のポジション以外は身長上回つてましたから。」

「

「ミスマッチか。」

「はい。」

「俺やタカはあまり身長差は気にせずプレーしてたが、他のポジションは辛そうだった。」

「いつしかマネージャーも全員揃つたみたいで、その中に有紀姉や陽子もいる。」

練習は、軽いランニング、ストレッチ、バス練、ランニングシュー、ト、スリーメン、3対3と過ぎていった。その頃女子の顧問とあのスーパー女子高生がやつてきた。なにやら綿貫さんと話している。そのあと伊藤先輩も呼ばれた。

「おー、集合。」

伊藤先輩の掛け声に、3対3を止め先生達のいるところへと集まつた。

「5対5のゲームな。で、この子も参加する事になったから。」

男子の練習に参加？確かにバスケの上達の近道は、自分より上手な奴らと練習することだ。特に自分より上手い奴と1対1をすると…。

おそらく負けるであろうが、そこから何かを感じて学んでいく事が大事だ。始めはその人のプレーを真似するだけでもいいのだ。

「自己紹介してもらつていい？」

「はい。1年の松本です。ポジションはセンターです。よろしくお願いします。」

「はい。よろしく。」

「内田先生。チームの振り分けは背の順で構わないですか？」

「任せる。そのかわり優先的にゲームに出してくれ。」

「分かりました。綿貫先生はどうします？」

「俺は審判でもするよ。」

「はい。よし。じゃ、背の順で並んで。」

背の順で並ぶと、加藤が1番でかく、次いで俺、その次が松本さんで、続いて大迫・タカラ、最後が大島だった。

チーム分けは背の高い順で蛇行しながら並び、1・4・5・8・9・12番目が同じチームになり、残りのメンバーが2番目に背の高い俺と同じチームとなつた。俺のいるチームのメンバーは、伊藤先輩の他は全員1年で片山・桜井・中西、そして松本さんだ。どうも見た目ウチのチームが劣る気がする。まずはお互いのチー

ムで一番小さい大島と桜井が休んでゲームがスタートするよつだ。

「背の順とはいえ、ちょっと辛いな…。」

伊藤先輩も同じように感じてるようだ。

「ディフェンスはマークに付かれた奴にマンツーマンで対応していく  
れ。」

「はい。」

「大介。」

「はい。」

「松本さんのフォロー頼むな。」

「頑張ります。」

「頼んだ。あと松本さん。」

「はい。」

「内田先生の指示通り、どんどんバス入れるから、勝負してね。」

「分かりました。」

「片山と中西は速攻走つてな。」

「はい。」

「あの～。」

「なんだ片山?」

「俺のポジションは……?」

「ん? あつ、そうか。片山は中学時代センターだもんな。」

チーム事情つてやつか…。中学時代は1番でかかったのだろう。片山の身長が決して低い訳ではないが、中学時代シュートティングガードだったタカより弱冠小さくみうだ。

「マークは多分、浅野だよな?」

「はい、多分…。」

「スマールフォワードやシューティングガードの勉強だと思って、浅野のにマークしながら動きよく見ておけ。」

「…分かりました。」

違うポジションは不安だよな…。しかもマッチアップがタカじやな…。うーん不安だ。谷津先輩と中西君のどこも不安だし…。伊藤先輩は前島か…、先輩のどこが頼りだな。

「大介。」

「はい。」

「攻撃は自由にやつていいぞ。なんて言つたつて県中学の得点王だからな。」

「ありがとうございます。」

そう言つてもらえると、気持ち的に楽になつた。でも、そんな事を言われなくても自由にやらせてもらつてしまつた。

「大介もバスが捌けると、もっといい選手になるんだから、回り見てフリーな選手いたらバス出してな。」

「はあ……。」

バスね……、そりや確率の問題で、頼れる奴がいてそれがフリーなら俺だつてバスを出したけど、中学時代のチームはタカくらいうか頼りになる奴がいなかつたのだ。シューートレンジの広い俺がボールを持てば、勝負以外考えられないのは仕方ない事だつた。

「始めるだ。」

ジャンプボールは当然俺と加藤。確か最後の公式戦では取れなかつた。

相手チームで唯一データがないのが大迫さん。俺的には、この人次第でやりやすいかどうか決まる……。まずはお手並み拝見といふか……、と思っていると遠目からタカがあつさりスリー・ポイントシュートを決めてしまったのだ。

あの野郎！そして俺らの攻撃……、サボるつもりはないが、俺はスリー・ポイントラインの外にいた。加藤を外まで引っ張り出して、中

を松本さんと大迫さんの一人の状態にして、一人のプレーを見るためだ。このワンプレー次第では俺もプレースタイルを考えなくてはならない。

そしてボールは松本さんへ入る。直ぐさまフェイントを入れドリブルをして、大迫さんのディフェンスを振り切りにかかる。最後はフェイダウェイからのショート。それは綺麗な放物線を描いてリングに吸い込まれた。『上手い…』思わず加藤が呟いたのが聞こえた。

内田先生から『大迫！女だと思つて遠慮してディフェンスしてると、どんどんやられるぞ！厳しくチェックしろ！』と激が飛んだ。いや、あれはいいプレーだ。

2度目の向こうの攻撃は加藤にボールが入るも、俺のディフェンスを嫌い一旦ボールを味方に返した。そして谷津さんがカットインし自らミドルショートを打つも外れ、俺がリバウンドを取つて終わつた。

よーし、点を取りにいってやる。

今度は俺も、中でポジションを取つてボールをもらいにいった。振り向いてゴールの方を向くと、そこには大きな壁加藤が立ちはだかる。俺はフェイントを入れワンドリブルして体を半歩加藤の前に出すると、強引にジャンプしてリングにダンクをかましてやつた。

初めて見る奴らはア然としている。

『コードの外で見学していた大島が『加藤！お前そいつに何点取られるつもりなんだ？』と言い、続けて『練習なんだからファールギリギリで止めにいくつもりでいけよ。』と怒鳴つていい。

でもこのゲームは、ウチらのチームの圧勝で終わるのだ。

## 21 ゲーム2

3分の休憩のあと2本目のゲームが始まる。

1本目は俺らのチームのセンター戦が機能し、相手はタ力のスリーポイントショート頼りの単調な攻めだつた。速攻は両チーム共そんなんに機能せずに終わつてゐる。両チーム共上手く潰しあつてゐるのだ。

大迫さんは松本さんに遠慮もあつたのかもしないが、期待してたよりも戦力としては厳しいものがある。谷津さんも前島も予想通りのプレイヤーだ。

加藤に関しては、少し鍛えなきゃダメだ。コイツは体が固いのもあるが、自分の身体能力を活かし切れてない。ただ俺もそうだつたが、普段の練習相手に事欠くのだ。中々中学に加藤クラスの体格の奴はいないだろう。だから練習では本気を出せず遠慮する傾向にあるのだ。だから伸び悩む。

その点、俺は地元のクラブチームに小さい時から顔を出していたせいか、練習相手に事欠くというのはなかつた。小学の頃から「テカ」かつたが、その頃クラブチームに混せてもらえば、まだまだ小さい方から数えた方が早かつた。そのためクラブチームではガードやフォワード、小学校のミニバスではセンターといった具合だ。だから今のような中も外もこなすハイブリッドなプレースタイルになつたのだ。

あとタ力は相変わらずショート確率がいい。片山のディフェンスが甘いのもあるが、5本打つて1本外しだけだ。

1本目は勝てたが、2本目のゲームでは、俺がこのチームで1番敵に回したくない奴が入つてくる。こいつがチームにいいリズムを与えるのは間違いない。フリーの奴を絶対見逃さないし、隙あらば自らカットインして切り込んでくる。こつちチームの桜井が未知数

だけに不安だ…。

そこで名前知らないマネージャーが『1分前です!』と体育館にいるみんなに聞こえるよう、「…」知らせてくれる。

「ウチのチーム集まつて!」

伊藤先輩だ。別に作戦なんか無いだろうに…。

「大介お前外やれ!」

「えつ?」

「なんだ不服か?」

「いえ…。」

「スリー・ポイントも狙つていいぞ。」

「はい。」

何故伊藤先輩が俺に優しく、俺のプレースタイルを知っているか…、それは先輩も地元のクラブチームで練習してたからだ。

そもそも先輩のお父さんが仲間を集めて作ったチームで、そのお父さんがミニバスのコーチをしてた。それでクラブの練習に誘つてもらつたのだ。

「片山は中でやつてみな。」

「えつ…、はい。」

「あと桜井は前島のマークな。俺が大島に付くから。」

おー、なんか的確な指示だ。さすが部長だけある。

「あと松本さんは、1本目と同じ感じで頑張つて。」

「はい。」

ちょうど指示が終わつたとこで、マネージャーが『時間です。』  
と言つてきた。

おーし2本目もやつてやるひじやないの！

2本目はウチらがエンドからスタートとなつた。伊藤先輩が上手く大島をマークしてるが、それでも何本かやられてる。

今回の俺はアウトサイドでのプレーなので比較的楽だ。加藤のティフェンスはリングの近くならガツガツ当たり負けしないし、リバウンドも強いので機能するが、外のティフェンスはザルもいいところだつた。スリー・ポイントも4本中2本決めた。さすがにタカのようにはいかない。

松本さんは1本目同様大迫さんを圧倒してた。そして意外に、ローポストでプレイしてる片山も、中学時代やつていたポジションだからか、いい感じで頑張つてる。

問題は桜井だ。そこそこでしかない。まあ、ウチは女子部みたいな強豪チームじゃないから、練習も緩いし3年間辞めずに続けてくれるだろ？

2本目は同点で終わつた。また3分の休憩である。10分ゲームを4セットやるやうだ。

「おい、大介。」

「はい。」

「次俺が休みだから、お前が考えろよ。」

「はい？先輩が休んだらダメですよ。ウチら機能しなくなります。  
だから、次は順番で俺が休みなの。大介がゲームキャプテンだから、よく考えろ…」

「そんな…。」

考えろって言つたつて…。まさか俺が大島のマークに付くわけにもいかないし…。それより責めだよな…、誰がボール回す？運ぶ？中西？桜井？ダメだ…、ここはみんなに相談か？でも誰に？  
そんな俺を見兼ねたのかチームの一人が声をかけてきた。

「次が一番大変だね。」

「そりなんだよ。」

「つて、松本さん！？」

「苗字聞いていい？」

「えつ、ああ…、若宮。」

「若宮ね。若宮君はどう」を潰したい？」

「ガードの大島。」

「次は?」

「シユーターのタカセンターの加藤。いや加藤だな。」

「ふうん。私はガードのマークはした事無いから加藤君に付こつか?」

「いや、いくら松本さんでも加藤は…、ちょっと待つて? 加藤押さえられる自信あるの?」

「自信はないし、多分無理だけど、マッチアップはしてみたい。」

「なんだこの強気な発言? 試しにやつてみるか…?」

「分かつた。」

2人で話してると、休憩中なのに、他の3人も集まってきた。

「次のティフェンスのマークなんだけど、加藤に松本さん。」

「はい。」

松本さんは強気だな…。

「で、大迫さんに山君。」

「おう。」

「で、タ力に…、浅野に中西君。」

「うん。」

「浅野にはペッタリ田のフュイス・トウ・フュイスでマークして。」

「オッケーやつてみる。」

「谷津先輩に桜井君。」

「分かつた。」

「谷津先輩はロングレンジは無いから、離し気味で付いて、カットインだけ注意して。」

「OK。」

「で、俺が大島。」

「これでよかつたのか…？」

「攻めは？」

「松本さんと片山君のロープストで始めよう。あとはマークがズレたら、俺が中に入るから。あと運ぶのは中西君が中心に桜井君とお願いします。」

「分かつた。」

「ダメなら俺が運べばいい。」

「時間でーす。」

あれつ？一分前つて言つた？聞き逃しただけか？

「よし行こう！」

守りはそこそことかなんとかなった。松本さんは2回ほど加藤にぶつ飛ばされ、中西君もタ力に嫌がられながらもピッタリ食らい付いて頑張ってる。

だけど、攻めだ。桜井君が大島に3度スティールされ、なかなかフロントコートにボールを運べないでいた。その結果、やはりボール運びも俺がやる事になったのだ。デカイ俺がやる仕事じゃないが、フロントコートまでボールがこなければ攻めることも出来ない。結局、攻めも守りもガードになってしまった。

けどガードのポジションが嫌いなわけじゃない。むしろセンターでガツガツやるより好きだ。俺のマークは前と変わらず加藤なので、パスは通しやすいし、ショートを打つにもドリブルでカットインしていくにも楽な間合いなのだ。

しかし、じわじわと点差が離されていく。

分かつた事がある…、加藤って奴は、自分より上手い奴には弱気になり機能しないが、自分より劣る又は同じくらいの実力、又は体格的に有利なら、そこそこ働いてくれるということだ。この3本目も俺のマークで、ディフェンスの時はリング近くにいないが、オフェンスの時はマークが松本さんとこうこともあって、ことごとくリバウンドをもぎ取っている。

でも自分より上手い奴に勝負していかないのは、上達しない奴の典型的なパターンだ。

向こうチームはミスマッチを有効に使い、上手く試合を運んでいる。

また松本さんが吹き飛ばされた。たまたまガードの俺の方に飛んできたから手を貸してあげたのだ。

「大丈夫？」

「ありがと。」

手を差し出すと、それを握つて立ち上がつてきた。俺的にはなんでもない行為だったが、これを見ていた陽子が相当ヤキモチを妬いたみたいで、あとで大変だったのである。

「ディフェンスのマーク変わらうつか？」

俺の聞き方が悪かったのか、彼女の鬭争心に火が点いたらしい。

「やられた分はやり返すから、どんどんバス頂戴。」

「ああ、分かつた……。」

俺の聞きたかった事は、オフェンスの事じゃなくディフェンスの事だったのに……。それにやり返すといつても、攻めの時にマークしてるのは加藤じゃなく、大迫さんだし……。でもきっと、彼女の中ではやり返す事になるのだろう……。

結局3本目は序盤のリードが効いて、負けてしまった。

「大介は大島の事を、よく抑えてたよ。」

「そりゃ、どうも。」

「でも、お前がもっと攻めなきゃダメだよ。」

「ですね。」

「ラストは片山休みな。」

「やつと休みだー！」

あれつ？

「俺つて休み無ですか？」

「お前は無しだ。」

「マジですか…？」

「バイトで来れない日もあるんだから、いる日へりこしつかりこなせー！」

「うつ…、はい…。」

確かにそうなのだが、少しくらいは休みたい。久々のバスケという事もあって、すでに足がパンパンなのだ。夜中、寝てる最中に足がつらなければいいのだが…。

4本目はセンターのポジションでガンガン勝負してやった。ダンクもかましてやったし、外からも何本か決めてきた。スクリーンで味方をフリーにしてやる献身的なプレーもして、チームを機能させたつもりだ。それに伊藤先輩が戻ってきたことでもぐく楽にプレー出来たのだ。

そしていつの間にか、女子の顧問の内田先生がいなくなつた代わりに、女子の3軍にあたる選手達が、屋上からゾロゾロと移動してきた。おそらくその中に直江もいるのだろう。

女子部は総勢80人の大所帯で、そのうち1軍2軍の30人が新しい綺麗な体育館で練習している。それ以外のメンバーが3軍なのだ。その3軍全員が、1面しかないこの古い体育館でこのあと練習となる。

そもそもウチの女子バスケと女子バレーは全国レベルで、越県して入学していく選手が毎年何人かいるらしい。そのうちの1人が松本さんなのだが、入学2週目にして、男子に混ざつて練習するなんて可哀相な子だ。上級生を含め練習相手になる人がいないのだろう。レギュラーに大型な選手はいないのだろうか？もしいたとしても松本さんが上手過ぎて、相手にならないのかもしねり。

俺達男子は、ゲームのあとクールダウンに軽くストレッチをして、上がりとなつた。松本さんは1軍がいる体育館に戻つて練習に参加するみたいで、ゲームが終わつたあとすぐに新しい体育館へと移動してた。

「女子は何時頃までやるの？」

横でバツシユを脱いでいたタカに聞いてみると、

「こあと1時間くらいやるみたいよ。」

「それじゃ、帰り遅くなるんだな。」

「だな。」

それから俺達は部室に着替えに戻りに行くことだったのだが、体

育館の出入口のところで前島に声をかけられた。

「神田一・ちよつといいか?」

まだ前島にとつて俺は神田らしい。

「あつ、はい。」

「浅野は来なくていいよ。」

「…はい。大介先行つてるな。」

「おつ…。」

俺は前島について、体育館の1階にある格技場に入つていった。  
「」は主に廃部寸前の柔道部が使つてゐる場所らしい。

「なんすか?」

023 前島（前島也）

「無沙汰しています。長々放置してすみませんでした。  
丹のドリマ『ブザービー』終わっちゃいましたね。  
」。

「なんすか？」

「お前いつから福島と付き合つてんだよ？」

「えつ？」

「つたく…そんな事知つてどりあるんだよ？」

「いいから、言われた事に答えればいいんだよ。」

「…3月からです。」

「最近だな。」

「ええ…。」

「なんか聞いてるか？」

「なんか？微妙な言い方だな…。」

「先輩に関する事なんか話題にも上らないけど…例えばどんなん…？」

「チッ…。聞いてないんだな？」

「だから何を？」

「聞いてないなら別にいい。もつ行つていいく。」

「なんだそれ？」

「おー、神田。」

「なんすか？」

「お前、口の聞き方に注意しろよ！」

急に先輩面か？

「気にいらないなら、いつでもタイマン受取れますよ。タイマンが怖いなら別ですけど。」

「なつ、何を！？」

小学生の時と違つて、今は俺の方が完全に体格で上回つてゐる。俺は黒帯ではないが、空手の実力はそんなに変わらないだろう。

「いいだろ……。」

言つたその場で上段蹴りが跳んできた。それを左腕で受け止めずかさず足首を掴んだ。そのままの態勢から下段蹴りでもう片方の足を払うと、前島の体が宙に浮いて『ウワツ！』といつ声と“ドスン”といづ音と共に置に落ちた。

すかさず前島のマウンドポジションを取り、右の拳を振り上げ一気に前島田掛けて振り下ろした……

振り下ろしたが、鼻先で寸止めしてやつた。

「…。」

「迷惑なんで陽子にちよつかい出すの止めてもうりますか？」

「出してねえよ…。」

「…。」

「しねえから…、福島こな手え出しをねえから…。どこでくれ…。」

福島には…? こな…、福島こなだと…、この野郎マジでムカつく

…、

あれはちよづ2年前の夏休み…、ある噂が広まった。

その噂とは、バスケ部女子の屋良由紀子という子が夏休み中の部活の帰り道、何者かに性的暴行を受けた…、要は犯された…という噂だった。更に噂は拍車がかかり、彼女らしき女子の子の淫らな写メが、サイトに載つてると噂になつたのだ…、

俺の学年のバスケ部は一部の男女仲が結構良かつた。その女子の

グループには陽子は入っていなかつたのは残念だつたが…。そして仲良しグループの中から、自然とカップルが出来上がつていつたのだ。

その子もその流れに漏れず、男バスの奴と付き合つてていたのだが、そいつとは別にある男から交際を申し込まれていた。

それが一学年上の前島だつた。何度も交際を迫り、その度に『彼氏がいるから…。』と断わられた。それが納得いかない前島は、ストーカー紛いにしつこく付きまとつていたらしいのだ。

2学期に入つて1ヶ月経つた頃、その子は転校してしまつた。表立つたイジメはなかつたものの、回りの視線や、影でこそこそ話されるのに耐えられなかつたのだろう…。

真相は分からぬ。だが一組のカップルが破局したのは事実だつた。

「前島さんよ…、」

「どけつて言つてんだよ…」

前島は下で体を左右に振つてるが、この態勢では効果はなさそうだ。

「一つ教えてもらひてんだけど…、」

「……、なんだ…？」

「由紀子…、屋良由紀子やつたの前島さんすか?」

「チツ……、お前もやつたと思つたのかよ?」

「やつてないんすか?」

「やるわけないだろが!」

「じゃ、誰が……?」

「今更、そんな事知つてどうする?」

「もしあんただつたら、由紀子と勇の代わりに一発殴る。」

「ああ、丹羽勇な。」

「ああ、そうだ。」

「あんな奴……あんな弱い奴と付き合つたのが笑えるつーの。」

「あんな奴じやねえ、俺のダチだつたんだよ……っていうか、弱いつてなんだよ?」

「ダチ?同じ部活にいただけだろ?それにお前に直接関係ないだろ?」

「確かに俺は関係無いかもしれない、でもあんな噂が流れないで彼女があのまま学校にいたら……、勇がグレでバスケ辞めてなかつたら……」

「やつや、噂や。」

「は？でもあなたが由紀子に付きまとつてたのを、見かけた奴は沢山いる。」

「あの時はまだガキだった。」

「まだ2年経つてねえよ。」

「チツ…、お前には関係ねえだろ…、福島には手出ししねえから、どいでくれ。」

「うおおお…。」

また、右の拳を振り上げたが、殴る価値がない…その事に気付き、振り下ろすか迷っていると、

「待て、言ひ喋るから止める。」

意外とへタレになつていた前島がいた。ガキの頃は威張りくさつてたのに…。

「…。」

「さつかもも言つたが、あれは噂だよ。」

「聞いたりした俺が馬鹿だつたか…？」

「俺が噂を流したんだ。」

「噂を流した？何の為に？」「

「変な噂を流せば、付き合ひの奴と別れると想つてな……でも効き過ぎた……、まさか転校するとま……。」

「実際襲つたんじゃないのか？」

「そんな犯罪出来るわけねえだろ？それに誰が彼氏か早い段階で教えてくれてたら諒めてやつたのに……。」

勇はこんな奴のこんな疑惑のために堕ちてこつたのか……、

「……。」

「なあ、喋つたんだからどうしてくれ。」

なんか、やり切れない怒りが沸き上がつてきた。

「つまおお……。」

上げたままだった拳を俺は振り下ろした。『ヒイツ』前島は情けない悲鳴と共に目を閉じた。

振り下ろした拳は、前島の顔の右側の畳に『ドスン』と、叩き落とした。こんな奴殴る価値もねえ……、

「神田……、」

震えてるよつた前島の声が聞こえた。

「なんすか？」

「丹羽つて、どこの高校行つたんだ？」

「鷹…！？勇なら通信制にしたみたいですよ。つこでに言つとボクシングジムのプロ養成コースに通い始めたつて噂ですけどね。」

「プロ？」

「ええ…。最近は会つてないから分かりませんけど、卒業式の時に誰かが言つてましたよ。」

「やつ、やうか…。」

「俺はそれで前島から離れてやつた。そして、見下ろしながら、

「俺を気に入らなければ、いつでも粗手しますので…。」

「…。」

「そう言ふば、さつき鷹の事、弱い奴つて言つました？」

「ああ…、」

「そういえば勇が何日か学校を休んだあと、顔を腫らして登校したつて聞いたことがある。おそらく前島に何か聴きに行き、喧嘩を仕掛けて逆にやられたんだな…。」

「言つておきますけどあこつ性格はしつこですか、気を付けた方がいいですよ。」

「かつ、神田ー。」

「なんすか?」

「かつぎの話、丹羽にしないでくれー。」

「言わないですよ。連絡も取つてないから会つ機会もなこです。しかも、もう勇に田を付けられられてるんなら、言わなくとも同じじやないですか? いつかリベンジしてきますよ。」

「そんなん。」

「そんじゅー。」

「そつ言つて格技場をあとにした。許して欲しけりやプライド捨て頭下げに行けばいいのに…。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6041f/>

---

ブザービーター

2010年10月9日14時48分発行